

授 業 構 想

「変身したミンミンゼミ」

(六年)

「黄色いバケツ」

(二年)

廣 田 隆 志

教材「変身したミンミンゼミ」「黄色いバケツ」について、次の順序で記述する。

I 全文

II 学習目標

III 文章構成と時間・時数

IV 授業構想

1 教材文の各場面

2 教材解釈

3 本時の目標

4 板書

5 発問・説明

6 まとめ

V 読書指導の扱い

一「変身したミンミンゼミ」 河合雅雄・文 六年 光村図書

I 全文

篠山^{ささやま}城^{じょう}には、旧藩主^{きゅうはんしゅ}の青山公^{あおやまこう}をまつた青山神社^{あおやまじんじ}がある。その境内^{けいだい}には、すぎや松の太木^{おおい}がおいしげり、それらの樹間^{じゆかん}をくすのきや桜^{さくら}などがうめて、こんもりした林^{はやし}を作っている。夏にはセミしぐれに林は交響^{きやうぎやう}し、しばらくたたずんでいると耳^{みみ}が痛^{いた}くなるほどだ。

クモの巣^{くものす}あみの力がなくなってきた。竹をへぎ、直径十五センチほどの円形^{えんけい}を作り、それにクモの巣^{くものす}を張^はって、長い竹ざおに付ける。こつは、オニグモやコガネグモといった大形のクモの、ねんちやく力の強い糸^{いと}を張ることである。欠点^{けってん}は、何度^{なんど}も使^{もち}っているとねんちやく力が落ちたり、破れ^{やぶれ}がひどくなってだめになることだ。

じゃあ、つかみどりで遊ぼう、ということになった。上等^{じやうたう}のセミは難^{むずかしい}しいが、チッチを手でつかむというスリルを味わうことができ

る。運がよいときは、アブラゼミ、たまにはミンミンゼミやツクツクボウシがつかまるという感激だ^{げき}である。

桜の木には、まるで幹にできたこぶのように、チッチがいっぱいだ。でも、手でつかむのはそうたやすいことではない。ヘビがカエルをねらうやり方と同じだ。空気の上をすべるように静かに手をのびし、二十センチほどの間合いになると、全身の力をうでにこめてつき出す。

このとき、てのひらを開いて、幹に沿^そって手をのびし、セミをすり上げるようにすると、まず外れっこない。ただ、そうすればセミはつぶれてはじき飛ばされてしまうから、生けどりはできない。生けどりするためには、てのひらをおわん形に丸くし、その中にセミを入れこめばいいのだが、どうしてもスピードが落ちる。ほんのごくわずかな時間差を利用して、チッチはにげていく。

入道雲が青空につっ立っている。遠くから重いかみなりの音が伝わってくる。桜の木のままで休んでいる体に、一陣^{じん}の強い風が当たった。あせがしゅっと引き、皮ふが引きしまる。アフリカってこんな感じかもしれない。向こうの土手をゾウの大群がどっしどっしと歩いていたら、どんなにすばらしいことだろう。

急に体がきゅっとなり、いきなり大枝に取り付く。えものをねらうヒョウの気分だ。えものといっても小さなチッチだが、大枝に体をすべらせてにじり寄る気持ちは、野生のけもののそれとちっとも

変らない。

「やられた。」

ミトが大声でさげび、ペッペとつばをはいた。どうしたのかときくまでもない。チッチに小便をかけられたに決まっている。にげざまに、チッチはびゅっと小便を飛ばしていく。こちらの負けだ。チッチは、かりゅうどが近づいたのに気がつくとき、おしりを小さく上下にこする。このとき、チッチはすでににげる準備をしているのだ。そして、こちらの手の動きがおそいと、ひゅっと飛び立ちながらおみやげをくれていくのである。

「アホーッ。目に入ったらどうする。目えつぶれるぞ。」

「目えにもちょっと入った。痛いっ。」

半泣きの声に、ぼくはどなる。

「泣け。泣くんや。泣いてなみだで洗^{あら}うんや。」

ミトは、ワーッと声を出して泣いた。

「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう。」

顔をしかめ、声だけは泣いているミトを見ると、ぼくはおかしくなって思わず笑ってしまった。

「ちっともおかしいないっ。痛いだけや。」

ミトはどなり返したが、もらい笑いを始めた。まるでミトの姿^{すがた}は、幹につかまって大声で鳴いているセミと同じではないか。二人は大

声を上げて笑ってしまった。

あんまり笑ったので、なみだが出た。そのなみだでセミの小便は洗い流されてしまった。ぼくといえ、なみだが目にしみて痛かった。

樹上のセミとりにあきると、次は地中のセミの幼虫探しに夢中になった。地面に空いている穴を見つけたのだが、小さな穴でなければいけない。大きな穴は、幼虫が出てしまったぬけがらのことがほとんどだから。

あるとき、おもしろい発見があった。小さな穴に真っ黒な虫を見つけた。ほり出してみると、クワガタのめすを細くしたような甲虫だった。これは珍種にちがいないと喜び勇んで持って帰り、図鑑で調べてみると、クロカミキリとあった。クワガタの一種かと思っていたのが、当てが外れてがっかりしたが、なんとも腹立たしかったのは、「全国に産し、普通種なり」とあったことだ。ほり出したせいかくの宝物を、目の前でいきなり金づちでたたきつぶされたような無念さ、これを書いた人は、よほど意地悪な人なのだろう。

セミの幼虫は土の中にうめて、孵化するのを楽しんだ。幼虫では、セミの種類の区別がつかない。孵化して初めて分かる。チッチやアブラゼミはそれぞれ普通種でもおもしろくもなかったが、ミンミンゼミやツツクボウシがかえるかもしれない、という期待があった。どちらも山までとりに行かなきゃならないし、高い木にいるのとるのは難

しい。それに、ひょっとしたらクマゼミが出てくるかもしれない。このゆうだいなセミはこの地ではめったにお目にかかることができず、みんなのあこがれの的だった。もしこいつだったら、先生やお母さんの言うことは、なんでも一回だけは聞いてもよいと思う。

「よろいをかぶったような幼虫から、どうしてうすい羽をもったセミが生まれるんやろ。」

と、ミトが不思議そうに言う。ほんとにおかしなことだ。奇妙きつれつとはこのことだ。体の大きさだって、幼虫の三倍ほどはある。風船をふくらませるように、生まれるとき空気を吸いこんでふくれるのだろうか。それよりも摩訶不思議なのは、どうして幼虫とはまるでちがった姿に変わるのだろうか、ということだ。

変身の正体を見きわめようということになった。だが、問題は早起ししなければならないことだ。朝起きると、セミはいつもかえった後だから、よほど朝早く孵化するにちがいない。

いなかから遊びに来たおじいさんに言わせると、「セミの子はな、朝日の光を吸いこみ、その力でかえるんじや。」

でも、手伝いのおじいさんは、「ぼん、それはちがうわな。土を水でぬらさんとあかん。水を吸って、あの固いからをやわらかにしないと、ぬけ出せん。それには、夜つゆをしっかり浴びないかん。」と言う。

どちらが本当か知らんが、とにかく毎朝早く起きるのはかなわない。

お化けの正体をあばくような意気込みで、三日間早起きしたが、幼虫は土の中から出てこない。水をかけたりほり出して木に止まらせたりしてみたが、だめ。三日後に幼虫は死んでしまった。別の幼虫を用意すると、兄貴の特権^{けん}を利用して、ミトに早起きを命じた。そして、幼虫がかえりだしたら起こしてくれとたのんだ。

ミトが寝間^{ねま}へかけこんできた。

「すごいのかえっとる。」

「かえった後なら、しょうがないわ。」

ふとんの上に横になったまま、うるさそうにぼくは言った。もうひとねむりしよう。

「ミンミンらしいよ。羽がすき通ってる。」

ぼくは、がばと飛び起き、幼虫をうめた植木ばちへ走った。

二人は息をのんで、植木に止まっているセミに見入った。とうめいな羽に淡緑色^{たんりくしき}の翅脈^しが走り、まるで朝のようせいのように神秘的だった。なんというとうめいな美しさだろう。ミンミンが誕生^{たんじ}したのだ。山にいるミンミンの翅脈は黒ずんでいるが、生まれたてのものは、エメラルドの針金で作ったみたいだ。天使の羽というのは、きつとこのようなものなんだろう。

ぼくは息をのんで、この造化の不思議に吸いこまれてしまう。

「あれっ、羽がうす茶色になってきた。」

ミトが、見てはならないものを見たように言う。

「ほんとだ。おかしいな。」

そのとき、お母さんの声がした。朝ご飯のしたくができたというので、ぼくらはひとまず天使の羽の鑑賞^{かんしょう}を打ち切った。

みそしるがおいしい。もういっぱい、と飲んでるうちに、ミトはご飯をそこそこに済^すませて、天使の羽を見に走っていった。ぼくも、すごいものを見せるからと、タント兄^{にい}を引っ張っていった。

植木ばちの前に、ミトが棒立ち^{ぼうたち}になっていた。ふり返った顔が、なんとも情けない。

「どうした。にげたんか。」

「いや。」

とミトは力なく言い、植木ばちを指さした。なんと。そこには茶褐^か色のアブラゼミがいるではないか。

タント兄はにたと笑い、

「おまえら知らなかったのか。アブラでも、かえったときは、ミンミンみたいに羽がすき通ってるのや。」

その言葉を聞き流しながら、ぼくは、毎朝ミトに早起きさせたことをくいていた。お母さんだったら、こう言うだろう。

「自分が楽しようとばかりしたから、きつとばちが当たったんだよ。」と。

II 学習目標

○ ぼくは孵化したばかりのセミをミンミンゼミだとばかり思っていたが、時間の経過によってアブラゼミだと分かりがっかりしたこと、このために弟に早起きを命じたことを悔いていることが分かる。

○ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。

○ 文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

○ 人物像や表現の工夫について感想をまとめることができる。

III 文章構成と時間・時数

後半			前半			構 成	ペ ー ジ	時 間	時 数
山 場	展 開	導 入	山 場	展 開	導 入				
P 2 3 4 L 1 P 2 3 5 L 9	P 2 3 2 L 1 P 2 3 3 L 2 0	P 2 3 2 L 8 P 2 3 2 L 1 0	P 2 3 1 L 1 0 P 2 3 2 L 7	P 2 3 0 L 4 P 2 3 1 L 9	P 2 3 0 L 1 P 2 3 0 L 3				
1	1	1	1	1	1				
4	3	2	1	1	1				

IV 授業構想

1 <前半> 導入・展開（第一時）

篠山^ア城には、旧藩主^イの青山公^ウをまつた青山神社^エがある。その境内^オには、すぎや松の太木^カがおいしげり、それらの樹間^キをくすのきや桜^クなどがうめて、こんもりした林^ケを作っている。夏にはセミしぐれに林は^コ交響し、しばらくたたずんでいると耳^セが痛くなるほどだ。

クモの巣^ソあみの力がなくなってきた。竹^タをへぎ、直径十五センチほどの円形^ツを作り、それにクモの巣^テを張って、長い竹ざお^トに付ける。こつは、オニグモ^ツやコガネグモ^テといった大形のクモの、ねんちゃく^チ力の強い糸^ツを張ることである。欠点は、何度も使っているとねんちゃく^チ力が落ちたり、破れがひどくなってしまうことだ。

じゃあ、つかみどりで遊ぼう、ということになった。上等^ニのセミは難しいが、チッチ^ヌを手でつかむというスリル^ネを味わうことができる。運がよいときは、アブラゼミ^ノ、たまにはミンミンゼミ^ハやツクツクボウシ^ハがつかまるという感激^ハだっている。

桜の木には、まるで幹にできたこぶ^ヒのように、チッチがいっぱいだ。でも、手でつかむのはそうたやすい^フことではない。ヘビがカエルをねらうやり方と同じだ。空気^ヘの上をすべるように静かに手をのびし、二十センチほどの間合いになると、全身の力をうでにこめてつき出す。

このとき、てのひらを開いて、幹に沿って手をのびし、セミをすり上げるようにすると、まず外れっこない。ただ、そうすればセミはつぶれてはじき飛ばされてしまうから、生けどりはできない。生けどりするためには、てのひらをおわん形に丸くし、その中にセミを入れこめばいいのだが、どうしてもスピードが落ちる。ほんのごくわずかな時間差を利用して、チッチはにげていく。

入道雲が青空につつ立っている。遠くから重いかみなりの音が伝わってくる。桜の木のまだで休んでいる体に、一陣の強い風が当たった。あせがしゅっと引き、皮ふが引きしまる。アフリカってこんな感じかもしれない。向こうの土手をゾウの大群がどっしどっしと歩いていたら、どんなにすばらしいことだろう。急に体がぎゅっとなり、いきなり大枝に取り付く。えものをねらうヒョウの気分だ。えものといっても小さなチッチだが、大枝に体をすべらせてにじり寄り寄り気持ちは、野生のけものそれとちっとも変らない。

2 教材解釈

ア「篠山城」

- ・ 兵庫県篠山市にあるおかの上に築かれた城。そのあとに、青山神社がある。（教科書の注）

イ「旧藩主」

- ・ 「旧」 古い。元。
- ・ 「藩主」 江戸時代、藩を治めていた大名。
- ウ「公」

- ・ （身分の高い人の後について）敬う気持ちを表す言葉。
- エ「まつた」

- ・ 「まつる」 がある場所に置いて、神として敬う。
- オ「境内」

- ・ 神社の囲いの中。
- カ「おいしげり」

- ・ 「おいしげる」 木がよく育ってたくさん生える。
- キ「樹間」

- ・ 木と木との間。
- ク「くすのき」

- ・ 暖かい地方に生えている高木。冬も葉が落ちない。根・幹・葉から樟脳（衣類につく虫を防ぐ）を取る。

ケ「うめて」

- ・ 「うめる」 ぶさぐ。
- コ「こんもり」

- ・ かたまってたくさん茂っている様子。

サ「セミしぐれ」

- ・ たくさんの蝉が一斉に鳴いている様子。

シ「交響」

- ・ 響き合うの意。

ス「たたずんでいる」

- ・ そこに立ち止まる。

セ「耳が痛くなるほどだ」

- ・ 余りの蝉の鳴き声に聞いているのが辛くなるほどである。

- ・ ここまでは、篠山城の青山神社における蝉時雨の説明である。

ソ「クモの巣あみの力がなくなってきた」

- ・ 「クモの巣あみ」は、クモの巣で作った網のことであり、次の文で作り方が述べられている。

「力がなくなってきた」は、網としての効果がなくなってきたことで、これも後の文で粘着力が弱まったり破れたりする」とが述べられている。

タ「へぎ」

- ・ 「へぐ」＝薄く削り取る。

チ「こつ」

- ・ うまいやり方。

ツ「オニグモ」

- ・ コガネグモ科のクモ。体長約二・五センチメートル。全体強剛で暗褐色。歩脚は太く長い。夏、軒下などに円網を張る。日本全土に分布。

テ「コガネグモ」

- ・ コガネグモ科のクモ。雌は二十一ミリメートル。雄は五ミリメートル。草間に円網を張り、昆虫を捕食。本州以南に分布。鹿児島では、雌を訓練してクモ合戦をさせる。

ト「ねんちゃく」

- ・ 粘りつくこと。

ナ「つかみどり」

- ・ 手で一度につかんだ物を取る。

ニ「上等のセミ」

- ・ 次の文に出てくるアブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシなどである。

ヌ「チッチ」

- ・ ここでは、ニイニゼミのことを指す。（教科書の注）

- ・ 「ちちちちち」と鳴く。

ネ「スリル」

- ・ ひやひや、はらはらするような気持ち。

ノ「感激」

7

・ 心に深く感じること。

ハ「こぶのように」

・ チッチが盛り上がってとまっている様子の比喩表現。

ヒ「たやすい」

・ やさしい。簡単だ。

フ「空気の上をすべるように」

・ 空中をすうとなめらかにの意。

ヘ「間合い」

・ 距離。

ホ「すり上げる」

・ 手を押しつけて上へ動かす。

マ「外れっこない」

・ 狙ったとおりになる。

ミ「はじき飛ばされて」

・ はね飛ばされて。

ム「時間差を利用して」

・ 擬人法。

メ「青空につっ立っている」

・ 「つつ立つ」≡真っ直ぐに立つ。

・ 擬人法。

モ「一陣」

・ 「一陣の風」≡激しい勢いでさっと一吹きする風。

ヤ「しゅっと」

・ 「すっと」≡瞬時に音もなく行われるさま。

ユ「引きしまる」

・ かたくしまる。強くしまる。

ヨ「向こうの土手をゾウの大群がどっしどっしと歩いていたら、

どんなにすばらしいことだろう」

・ 「どしどし」≡重い物が地響きを立てて移動するさま。

・ 唐突にアフリカを思い、ゾウの大群を想像する発想の面白さがある。

ラ「きゅっと」

・ 引き締める動作が瞬間的になされるさま。

リ「いきなり」

・ 急に。突然。

ル「取り付く」

・ すがりつく。つかまる。

レ「ヒョウの気分」

・ 比喩表現。

ロ「にじり寄る」

- ・ じりじりと近寄る。

ワ「野生のけもののもそれとちっとも変らない」

- ・ 「それ」＝場合。狩り。

- ・ ヒョウの気分になり、自分を野生のけものに見立てているところにも、ややオーバーだが発想の面白さがある。

3 本時の目標

篠山城にある青山神社の耳が痛くなるほどの蝉時雨の中で、ぼくはチッチのつかみ取りで野生のヒョウの気分になっていることが分かる。

4 板書

こんもり
セミしぐれ
交響

たたずんでいる
耳が痛くなるほどだ

竹をへぎ
こつ

ねんちやく力

上等のセミ

スリルを味わう

感激
空気の上をすべるように

間合い

一陣の強い風

取り付く

にじり寄る

野生のけもののもそれ

比ゆ

ぎん法

5 発問

- A 「こんもり」とは、どんな様子のことか。
- B 「セミしぐれ」とは、どんな様子のことか。
- C 「交響」とは、どういう意味か。

登場人物の人がらや性格、表現上の工夫について感想を書く。

D 「たたずんでいる」とは、どうしていることか。
E 「耳が痛くなるほどだ」は、蟬の何を表しているか。
F 「竹をへぎ」とは、竹をどうすることか。

G 次の言葉は、どんな意味か。

① 「こつ」

② 「ねんちゃく力」

H ここで言っている「上等なセミ」とは、どんな蟬のことか。

I 「スリルを味わう」とは、どんな気持ちになることか。

J 「感激」とは、心に深く感じることであるが、この場合を別の言葉で言い換えるとはどんな言葉になるか。

K 「空気の上をすべるように」とは、どのように手を動かしたのか。

L 「間合い」を別の言葉で言い換えるとはどんな言葉になるか。

M 「一陣の強い風」とは、どのような風のことか。

N 次の言葉は、どんな様子のことか。

① 「取り付く」

② 「にじり寄る」

O 「野生のけものそれ」の「それ」には、どんな言葉が当てはまるか。

P 比喩、擬人法を抜き出してみよう。

ア 1 〈前半〉 山場（第二時）

「やられた。」

イトミトが大声でさけび、ベッベとつばをはいた。どうしたのかときくまでもない。チツチに小便をかけられたに決まっている。にげざまに、チ

ツチはぴゅっと小便を飛ばしていく。こちらの負けだ。チツチは、かりゅうどが近づいたのに気がつく、おしりを小さく上下にこする。

このとき、チツチはすでににげる準備をしているのだ。そして、こちらの手の動きがおそいと、ひゅっと飛び立ちながらおみやげをくれていくのである。

「アホーッ。目に入ったらどうする。目えつぶれるぞ。」

「目えにもちょっと入った。痛いっ。」

半泣きの声に、ぼくはどなる。

「泣け。泣くんや。泣いてなみだで洗うんや。」

コミトは、ワーッと声を出して泣いた。

「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう。」

顔をしかめ、声だけは泣いているミトを見ると、ぼくはおかしくな

って思わず笑ってしまった。

シ

「ちっともおかしいないっ。痛いだけや。」

ス

ミトはどなり返したが、もらい笑いをし始めた。まるでミトの姿は、
幹につかまって大声で鳴いているセミと同じではないか。二人は大声
を上げて笑ってしまった。

ソ

あんまり笑ったので、なみだが出た。そのなみだでセミの小便は洗
流されてしまった。ぼくといえ、なみだが目にしみて痛かった。

タ

2 教材解釈

ア「やられた」

- ・ 展開では、チッチとりの話がやや解説的な部分も入れながら
ぼく（＝語り手）によって語られた。山場のここでは、具体的
なエピソードが語られる。

イ「ミト」

- ・ ぼくの兄弟は三人で、長男が「タント兄」、次男が「ぼく」、
三男が「ミト」である。「タント」「ミト」のネーミングについ
ての説明はない。

ウ「チッチに小便をかけられたに決まってる」

- ・ ぼくにも何度かこういう経験があったからであろう。

エ「にげざま」

- ・ 逃げると同時に。逃げる時に。

オ「こちらの負けだ」

- ・ チッチのつかみ取りが失敗したこと。

カ「かりゅうど」

- ・ チッチをつかみ取りしようとする者の比喻表現。

キ「おみやげをくれていく」

- ・ チッチが小便を飛ばしていくことの比喻表現。

ク「泣け。泣くんや。泣いてなみだで洗うんや」

- ・ どじを踏んだ（＝間拔けな失敗をする）弟に、「アホーッ」
と言いながらも適切な処置を親しさからの乱暴な口調で教えて
いるところに兄さんらしさが表れている。

ケ「ワーッと声を出して泣いた」

- ・ 目に入って痛いということもあるが、ぼくの指示を素直に聞
いて実行している。

コ「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう」

- ・ ミトが、ぼくを頼りにし甘えて訴えている。

サ「しかめ」

- ・ 「しかめる」＝眉の付け根に皺を寄せる。

シ「ちっともおかしいないっ。痛いだけや」

- ・ 弟の様子に笑いだしたぼくを見て、「笑うようなことではな
い。痛いだけや」と腹を立ててどなり返している。

ス「もらい笑い」

・ 他人の笑うのに誘われて笑うこと。

セ「幹につかまって大声で鳴いているセミと同じ」

・ ぼくが笑ってしまった理由であり、比喩表現。

ソ「そのなみだでセミの小便は洗い流されてしまった」

・ 「ミトの目に入った」が省略されている。

タ「ぼくといえば、なみだが目にしみて痛かった」

・ ミトはチッチの小便で目を痛がっていたが、ぼくの場合は涙が目にしみて痛かったの意。

3 本時の目標

ミトがチッチに小便をかけられたことで、ぼくとミトは笑い泣きをしたことが分かる。

4 板書

にげざま

・ にげると同時に、にげる時に

こちらの負けだ

・ チッチのつかみどりの失敗

かりゅうど

・ チッチのつかみどりをする者

おみやげをくれていく

・ 小便を飛ばしていく

泣いてなみだで洗うんや

・ 小便をなみだで洗い流せ

泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう

・ あまえている、たよりにしている

ちっともおかしいないっ

・ 笑うようなことではない

・ 腹を立てている、おこっている

もらい笑い

・ 他人の笑うのにさそわれて笑うこと

幹につかまって大声で鳴いているセミと同じ

・ ぼくが笑ってしまったこと

そのなみだでセミの小便は洗い流されてしまった

・ ミトの目に入った

ぼくといえば

・ ぼくの場合でいえば、ぼくのことといえば

比喩

・ かりゅうど、おみやげ、幹につかまって大

声で泣いているセミと同じ

5 発問

A 「にげざま」とは、どういう意味か。

B 「こちらの負けだ」とは、何のことを言っているのか。

C この場合「かりゅうど」とは、どういう人のことか。

D 「おみやげをくれていく」とは、何をどうしていくことか。

E 「泣いてなみだで洗うんや」とは、どういう意味か。

F 「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう」とミトがぼくに聞いているのはどんな気持ちからか。

G 「ちっともおかしいないっ」

① どういうことを言っているのか。

② ミトはどんな様子か。

H 「もらい笑い」とは、どういう笑いのことか。

I 「幹につかまって大声で鳴いているセミと同じ」とは何の理由か。

J 「そのなみだでセミの小便は洗い流されてしまった」の文には、何が省略されているか。

K 「ぼくといえば」とは、どういう意味か。

L 比喩を抜き出してみよう。

6 まとめ

登場人物の人がらや性格、表現上の工夫について感想を書く。

1 ◇後半◇ 導入・展開（第三時）

樹上のセミとりにあきると、次は地中のセミの幼虫探しに夢中になった。地面に空いている穴あなを見つけるのだが、小さな穴でなければい

けない。^ア大きな穴は、幼虫が出てしまったぬけがらのことがほとんどだから。

あるとき、おもしろい発見があった。小さな穴に真っ黒な虫を見つけた。ほり出してみると、クワガタのめすを細くしたような甲虫イだった。これは珍種ウにちがいないと喜び勇んで持って帰り、図鑑で調べてみると、クロカミキリオとあった。クワガタの一種カかと思っていたのが、^キ当てが外れてがっかりしたが、^クなんとも腹立たしかったのは、「全国に産し、普通種なり」とあったことだ。ほり出したせいかくの宝物を、目の前でいきなり金づちでたたきつぶされたような無念さ、^コこれを書いた人は、よほど意地悪な人なのだろう。

セミの幼虫は土の中にうめて、^シ孵化するのを楽しんだ。幼虫では、セミの種類の区別がつかない。孵化して初めて分かる。チツチやアラゼミスはそれぞれ普通種でもおもしろくもなかったが、ミンミンゼミやツクツクボウシがかえるかもしれない、という期待があった。^セどちらも山までとりに行かなきゃならないし、高い木にいるのとるのは難しい。それに、ひょっとしたらクマゼミソが出てくるかもしれない。このゆうだいなセミはこの地ではめったにお目にかかることができず、^タみんなのあこがれの的ツだった。^テもしこいつだったら、先生やお母さんの言うことは、^トなんでも一回だけは聞いてもよいと思う。

「よろいをかぶったような幼虫から、どうしてうすい羽をもったセミが生まれるんやろ。」

と、ミトが不思議そうに言う。ほんとにおかしなことだ。奇妙きてれつとはこのことだ。体の大ききだって、幼虫の三倍ほどはある。風船をふくらませるように、生まれるとき空気を吸いこんでふくれるのだろうか。それよりも摩訶不思議なのは、どうして幼虫とはまるで違った姿に変わるのだろうか、ということだ。

変身の正体を見きわめようということになった。だが、問題は早起しななければならないことだ。朝起きると、セミはいつもかえった後だから、よほど朝早く孵化するにちがいない。

いなかから遊びに来たおじいさんに言わせると、「セミの子はな、朝日の光を吸いこみ、その力でかえるんじゃ。」

でも、手伝いのおじいさんは、「ぼん、それはちがうわな。土を水でぬらさんとあかん。水を吸って、あの固いからをやらかにしないと、ぬけ出せん。それには、夜つゆをしつかり浴びないかん。」と言つ。

どちらが本当か知らんが、とにかく毎朝早く起きるのはかなわない。お化けの正体をあばくような意気込みで、三日間早起したが、幼虫は土の中から出てこない。水をかけたりほり出して木に止まらせたりしてみたが、だめ。三日後に幼虫は死んでしまった。別の幼虫を用

意すると、兄貴の特権を利用して、ミトに早起きを命じた。そして、幼虫がかえりだしたら起こしてくれとたのんだ。

2 教材解釈

ア「大きな穴は幼虫が出てしまったぬけがらのことがほとんどだから」

・ この「ぬけがら」は、蟬が脱皮した後の皮殻のことではなく、幼虫が出てしまつてからっぽになっていることを言っている。

・ ここまでが、幼虫探しに夢中になったことの説明である。

イ「甲虫」

・ 体の周りが固い昆虫。かぶと虫やほたるなど。

ウ「珍種」

・ 珍しい種類。

エ「喜び勇んで」

・ 「喜び勇む」＝嬉しさや楽しさで心がふるい立つ（＝元気が出る）。

オ「クロカミキリ」

・ カミキリムシ科の昆虫。体長十五〜二十五ミリ。全体が黒くにぶい光沢があり、下面に黄褐色の短毛を密生する。カミキリムシの中ではずんぐりした体つきである。夏に現われ、灯火に集まる。幼虫はマツ、スギ、ヒノキなどに穴をあける害虫。各地に分布。

カ「一種」

- ・ 同じ種類。

キ「当てが外れて」

- ・ 「当て外れ」|| 思っていた通りにならないこと。

ク「なんとも」

- ・ 本当に。まったく。

ケ「腹立たしかった」

- ・ 「腹立たしい」|| しゃくにさわる。腹が立つ。

コ「いきなり金づちでたたきこわれたような無念さ」

- ・ 「無念」|| 悔しいと思うこと。

・ 喜び勇んでいた気持ちが一瞬のうちにつぶれてしまったことの比喻表現であり、珍種に対する思い入れの強さが分かる。

サ「よほど意地悪な人」

- ・ 恨めしく思う気持ちがこう言わせている。言いがかりのだがユーモラスである。

シ「孵化」

- ・ 殻を破って外に出ること。

ス「それこそ」

- ・ 「それ」を強める言い方で、前述の「全国に産し、普通種なり」を指している。

セ「どちらも」

- ・ ミンミンゼミとツクツクボウシ。

ソ「クマゼミ」

- ・ セミの一種。日本のセミ類中最大で、体長四〜五センチメートル。体は黒色、金灰色の微毛がある。翅は透明、翅脈は緑色。神奈川県以西の暖地に多く、盛夏の頃盛んに「しゃあしゃあ」と鳴く。

タ「ゆうだい」

- ・ 堂々として大きく、立派な様子。

チ「めったにお目にかかることができません」

- ・ 「めったに」|| ほとんど。ごくまれにしか。
- ・ 「お目にかかる」|| 「会う」のへりくだった言い方。お会いする。

- ・ 貴重なクマゼミを敬って、あたかも貴人に対するような言葉遣いである。

ツ「あこがれの的」

- ・ 強く心が引かれ、そうなりたいと思うめあて。

テ「もしこいつだったら」

- ・ クマゼミのことを「ゆうだいなセミ」「めったにお目にかかることができません」「あこがれの的」と最大級に持ち上げて置い

て、次の文でいきなり「こいつ」と落としている。その落差の表現もまたユーモラスである。

ト「なんでも一回だけは聞いてもよいと思う」

・クマゼミが手に入るのだったらの代償としての例が子供らしい発想である。

ナ「よろいをかぶったような」

・幼虫の姿からの比喻表現。

ニ「奇妙きてれつ」

・なんとも奇妙なさま。(教科書の注)

・「奇妙」|| 珍しく、不思議な様子。

ヌ「摩訶不思議」

・たいへん不思議なこと。(教科書の注)

ネ「見きわめよう」

・「見きわめる」|| 見届ける。確認する。

ノ「かえった後」

・蟬の姿になった後。

ハ「言わせると」

・くの言うところによれば。

ヒ「ぼん」

・男子の称。坊や。

フ「あかん」

・「(「らち明かぬ」の略。多く関西で使う) うまくいかない。だめだ。

ヘ「しっとり浴びないかん」

・「しっとり」|| 物に湿り気がある様子。

・「浴びる」|| 体にかける。

ホ「かなわない」

・我慢できない。やり切れない。

マ「あばく」

・分からないことを明らかにする。

ミ「意気ごみ」

・何かをしようと張り切る気持ち。

ム「兄貴の特権を利用して、ミトに早起きを命じた」

・「特権」|| ある身分の人だけが持っている特別の権利。

・「命じる」|| 言いつける。

・三日間早起きしたが、毎朝早起きするのに閉口したぼくは、兄であるということだけで弟に早起きを言いつけた。早起きは眠いからというだけで弟に押し付けたのは特権の悪用である。むしろ兄であるのなら、自分がやらなければならぬのである。

メ「幼虫がかえりだしたら起こしてくれとたのんだ」

- ぼくが一番見たい「幼虫がかえりだした」時に起こしてくれと虫のいいことを頼んでいるが、命じているのと変わらない。

3 本時の目標

地中の蟬の幼虫探しに夢中になったことと、孵化する幼虫の変身の正体を見極めようとしたことが分かる。

4 板書

ぬけがら

- からっぽになっていること

甲虫

- 体の周りが固いこん虫（説明）

喜び勇んで

- うれしさや楽しさで元気が出ること

一種

- 同じ種類

当てが外れて

- 思った通りにならないこと

無念

- くやしいと思うこと

- 珍種に対する期待が大きかった

よほど意地悪な人

- わざわざ「全国に産し、普通種なり」と書いてあったことから

- 言いがかり

- おもしろい、ユーモア

孵化

ゆうだい

お目にかかる

- からを破って外へ出ること
- 堂々として立派なこと
- お会いする
- 相手を敬う言葉

あこがれの的

- ぜひ一度は見たいと強く思うこと

こいつ

- クマゼミ

- ゆうだいなゼミ、めったにお目にかかることができず、あこがれの的

- 落差

なんでも一回だけは聞いてもよいと思う

- うれしさの程度

見きわめよう

- 見とどけよう、確かめよう

言わせると

- 言うところによると（説明）

ぼん

- ぼうや（説明）

- 分からないことを明らかにする

意気こみ

- 張り切る気持ち

兄貴の特権を利用して、ミトに早起きを命じた

- 毎朝早起きをするのがかなわないから
- 早起きはねむいから
- 勝手気まま、おしつけた

比喩

・いきなり金づちでたたきこわされたような、
よろいをかぶったような

5 発問・説明

A この場合の「ぬけがら」とは、何のことを言っているのか。

B 「甲虫」とは、体の周りが固い昆虫のことである。

C 「喜び勇んで」とは、どんな様子のことか。

D 「一種」とは、どういう意味か。

E 「当てが外れて」とは、どんな様子のことか。

F 「無念」

① どんな気持ちになることか。

② なぜ無念に思ったのか。

G 「よほど意地悪な人」

① なぜこのように思ったのか。

② こういうことを「くをつける」と言うが、「く」はどんな言葉が入るか。

③ こういうことを言っているべくをどう思うか。

H 「孵化」とは、どうなることか。

I 「ゆうだい」とは、どんな様子のことか。

J 「お目にかかる」

① 別の言葉に言い換えると、どんな言葉になるか。

② これはどういう時に使われる言葉か。

K この場合の「あこがれの的」とは、どういうことか。

L 「こいつ」

① 誰のことか。

② クマゼミのことを前の文では、どのように表現していたか。

③ その表現の違いは、どんな面白さか。

M 「なんでも一回だけは聞いてもよいと思う」というのは、何を表しているか。

N 「見きわめよう」とは、どういう意味か。

O 「言わせると」とは、「言うところによれば」ということである。

P 「ぼん」とは、「坊や」ということである。

Q 「あばく」とは、どういう意味か。

R 「意気こみ」とは、どういう気持ちのことか。

S 「兄貴の特権を利用して、ミトに早起きを命じた」

① ミトに命じたのはどんな理由からか。

② これは本当に兄貴の特権なのか。

T 比喩を抜き出してみよう。

6 まとめ

登場人物の人がらや性格、表現上の工夫について感想を書く。

1 ◇後半◇ 山場（第四時）

ミトが寝間へかけこんできた。

「すごいのがかえっとる。」

「かえった後なら、しょうがないわ。」

ふとんの上に横になったまま、うるさそうにぼくは言った。もうひとねむりしよう。

「ミンミンらしいよ。羽がすき通ってる。」

ぼくは、がばと飛び起き、幼虫をうめた植木ばちへ走った。

二人は息をのんで、植木に止まっているセミに見入った。とうめいな羽に淡緑色の翅脈が走り、まるで朝のようせいのように神秘的だった。なんとというめいな美しさだろう。ミンミンが誕生したのだ。

山にいるミンミンの翅脈は黒ずんでいるが、生まれたてのものは、メラルドの針金で作ったみたいだ。天使の羽というのは、きっとこのようなものなんだろう。

ぼくは息をのんで、この造化の不思議に吸いこまれてしまう。

「あれっ、羽がうす茶色になってきた。」

ミトが、見てはならないものを見たように言う。

「ほんとだ。おかしいな。」

そのとき、お母さんの声がした。朝ご飯のしたくができたというので、ぼくらはひとまず天使の羽の鑑賞を打ち切った。

みそしるがおいしい。もういっぱい、と飲んでるうちに、ミトはご飯をそこそこに済ませて、天使の羽を見に走っていった。ぼくも、すごいものを見せるからと、タント兄を引っ張っていった。

植木ばちの前に、ミトが棒立ちになっていた。ふり返った顔が、なんと情けない。

「どうした。にげたんか。」

「いいや。」

とミトは力なく言い、植木ばちを指さした。なんと。そこには茶褐色のアブラゼミがいるではないか。

タント兄はにたっと笑い、

「おまえら知らなかったのか。アブラでも、かえったときは、ミンミンみたいに羽がすき通ってるのや。」

その言葉を聞き流しながら、ぼくは、毎朝ミトに早起きさせたことをくいていた。お母さんだったら、こう言うだろう。

「自分が楽しようとばかりしたから、きつとばちが当たったんだよ。」と。

2 教材解釈

ア「寝間」

- ・ 寝る部屋。寝室。

イ「がばと」

- ・ 勢いよく起きあがるさま。がばっと。

ウ「息をのんで」

- ・ 「息をのむ」|| 驚いてはっとする。

エ「見入った」

- ・ 「見入る」|| じっと見つめる。見とれる。

オ「とうめい」

- ・ 透き通っていること。

カ「淡緑色」

- ・ 薄い緑色。

キ「翅脈」

- ・ 昆虫の羽に見られる枝分かれした筋。(教科書の注)

ク「走り」

- ・ 「走る」|| ある方向に通ずる。

ケ「朝のようせいのように」

- ・ 「ようせい」|| 外国のお伽話などに出てくる森や花などの精。

- ・ かえったばかりのセミの様子の比喩表現。

コ「神秘的」

- ・ 不思議な感じがする様子。

- ・ セミの不思議さに敏感に反応している。

サ「なんというとうめいな美しさ」

- ・ 「なんという」|| 何とも言いようがないほど甚だしい。

- ・ 「とうめいな美しさ」は比喩表現の隠喩(|| たとえを用いながら、表現面にはその形式「如し」「ようだ」等を出さない方法。白髪を生じたことを「頭に霜を置く」という類)。

シ「黒ずんで」

- ・ 「黒ずむ」|| 黒みがかかる。

ス「エメラルドの針金で作ったみたい」

- ・ 「エメラルド」|| 透明な緑色の宝石。

- ・ 比喩表現。

- ・ 比喩表現。

セ「天使の羽」

- ・ 比喩表現(隠喩)。

ソ「造化の不思議」

- ・ 「造化」|| 何かによってつくり出されたもの。(教科書の注)

- ・ 比喩表現(隠喩)。

タ「吸い込まれてしまう」

- ・ ぼくの心を引きつけて夢中にさせてしまう。

チ「ひとまず」

・ 一応。

ツ「鑑賞」

・ 深く味わうこと。

テ「そこそこ」

・ 急いで終わらせる様子。

ト「引っ張って」

・ 無理に連れて行く。

・ ミンミンゼミの天使の羽を見せて驚かせてやろうと、意気揚々として無理に連れて行ったのである。

ナ「棒立ち」

・ (驚いた時などに) 棒のように真っ直ぐに立って動けなくなること。

ニ「なんとも情けない」

・ 「なんとも」 〓 本当に。全く。

・ 「情けない」 〓 惨めである。

・ 本当にがっかりした様子であった。

ヌ「力なく」

・ 「力ない」 〓 力がこもらない。気力が無い。

ネ「なんと」

・ (反語として) どうして。なぜ。

ノ「そこには茶褐色のアブラゼミがいるのではないか」

・ ミンミンゼミだとばかり思っていたら、実はアブラゼミであった。自分の思いの中でミンミンゼミがアブラゼミに変身したとして、それを題名「変身したミンミンゼミ」としたのである。

ハ「にたっと」

・ 声を出さずにうす気味悪い笑みを浮かべるさま。

・ 何も知らない弟たちに、えらそうに兄の貴禄を示してやや馬鹿にした笑いである。

ヒ「その言葉を聞き流しながら」

・ 「聞き流す」 〓 聞いた話を心にとめないでそのまま放っておく。

・ 思い違いをしてがっかりしたこと、物知り顔に言うタント兄をいまいましく(〓しゃくにさわる) 思ったからであろう。

フ「くいていた」

・ 「くい」 〓 済んだ後で、悪かったと思うこと。

・ こんなことなら、弟を毎朝早起きさせるのではなかったと弟を思いやる心に欠けていたと反省をしている。

へ「お母さんだったら、こう言うだろう。『自分が楽しようとばかりしたら、きつとばちが当たったんだよ。』と。」

・ 「自分が楽しようとばかりしたら」は、ミトに毎朝早起きさせて自分は寝ていたことであり、「きつとばちが当たった

んだよ」は、ミンミンゼミとばかり思っていたらアブラゼミであり、がっかりしたことを指している。

・ 倒置法。

3 本時の目標

ぼくがミンミンゼミだとばかり思っていたのは、アブラゼミであったことがっかりし、そのためにミトに早起きさせていたことを悔いたことが分かる。

4 板書

がばと

- ・ 勢いよく起きあがる、がばと

息をのんで

- ・ おどろいてはっとする

見入った

- ・ じっと見つめた、見とれた

淡緑色

- ・ うすい緑色

神秘的

- ・ 不思議な感じがする

黒ずんで

- ・ 黒みがかかる

エメラルド

- ・ とうめいな緑色の宝石（説明）

吸いこまれてしまう

鑑賞

- ・ ぼくの心を引きつけて夢中にさせてしまう
- ・ 深く味わうこと

そこそこ

- ・ 急いで終わらせる様子

なんとも情けない

- ・ 本当にがっかりした様子

茶褐色のアブラゼミがいるではないか

- ・ 変身したミンミンゼミ、題名

にたっと笑い

- ・ 弟たちをややばかにした笑い

その言葉を聞き流しながら

- ・ 思いちがいをしてがっかりしたこと

- ・ えらそうに言う兄がしゃくにさわった

くいていた

- ・ すんだ後で悪かったと思うこと

- ・ 弟にかわいそうなことをした

自分が楽しようとばかりしたから

- ・ 弟に毎朝早起きさせて自分はねていたこと

きつとばちが当たったんだよ

- ・ ミンミンゼミだと思っていたらアブラゼミ

でがっかりしたこと

比ゆ

- ・ 朝のようせいのように、

なんというとうめいの美しさ、

エメラルドの針金で作ったみたい、

天使の羽、造化の不思議

とう置法

・お母さんだったら、こう言うだろう。「自分が楽しようとはっかりしたから、きっとばちが当たったんだよ。」と。

5 発問・説明

A 次の言葉は、どんな様子のことか。

① 「がばと」

② 「息をのんで」

③ 「見入った」

B 「淡緑色」とは、どんな色か。

C 次の言葉は、どんな様子のことか。

① 「神秘的」

② 「黒ずんで」

D 「エメラルド」とは、透明な緑色の宝石のことである。

E 「吸い込まれてしまう」は、ぼくのどんな気持ちを表しているか。

F 「鑑賞」とは、どうすることか。

G 次の言葉は、どんな様子のことか。

① 「そこそこ」

② 「なんとも情けない」

H 「茶褐色のアブラゼミがいるではないか」というのは、この作

品の何に使われているか。

I 「にたと笑い」は、弟たちをどう思っている笑いか。

J 「その言葉を聞き流しながら」とあるが、ぼくはなぜ聞き流したのか。

K 「くいていた」

① どういう意味か。

② どんな気持ちからそうしたのか。

L 「自分が楽しようとはっかりしたから」とは、何をしたことか。

M 「きつとばちが当たったんだよ」とは、どうなったことか。

N 比喩、倒置法を抜き出してみよう。

6 まとめ

登場人物の人がらや性格、表現上の工夫について感想を書く。

V 読書指導の扱い

この教材を読書として扱う場合の観点について記述する。

一 内容について

1 題名の「変身したミンミンゼミ」の意味を考える。

〈後半〉の「山場」の孵化に関わる文には次のものがある。

① 「ミンミンらしいよ。羽がすき通ってる。」(P2334L6)
② とうめいな羽に淡緑色の翅脈が走り、まるで朝のようせいのように神秘的だった。(P2334L8)

③ なんとというとうめいな美しさだろう。(P2334L9)

④ ミンミンが誕生したのだ。(P2334L9)

⑤ 生まれたてのものは、エメラルドの針金で作ったみたいだ。(P2334L10)

⑥ 天使の羽というのは、きつとこのようなものなんだろう。(P2334L11)

⑦ ぼくは息をのんで、この造化の不思議に吸いこまれてしまう。(P2334L12)

ぼくはこのように、ミンミンゼミが誕生したとことその羽の美しさに魅了されてしまう。しかし、雲行きがおかしくなり出すのは、

⑧ 「あれ、羽がうす茶色になってきた。」(P2334L13)

⑨ 「ほんとだ。おかしいな。」(P2334L15)

であり、決定的になるのは、

⑩ なんと。そこには茶褐色のアブラゼミがいるではないか。(P2335L3)

⑪ 「アブラでも、かえったときは、ミンミンみたいに羽がすき通ってるのや。」(P2335L5)

である。ミンミンゼミとはかり思い込んでいたのは、アブラゼミであった。ミンミンゼミが変身してアブラゼミになったのではなく、もともとアブラゼミであったのである。ミンミンゼミがアブラゼミに変身するわけではない。自分の思いの中でミンミンゼミがアブラゼミに変身し

たとして、それを題名「変身したミンミンゼミ」としたのである。

2 登場人物の人物像と兄弟関係をとらえる。

(一) 登場人物の人物像

登場人物は、語り手のぼく(次男)、弟のミト(三男)、兄のタント兄(長男)の三人である。それぞれの人柄や性格が表れている文を抜粋する。

A 「ぼく」

語り手の「ぼく」には、子どもの頃の見方・考え方とこの文章を書いた時点での大人の「ぼく」の見方・考え方が重なって表現されている。

① 「アホーッ。目に入ったらどうする。目えつぶれるぞ。」(P2331L16)

② 「泣け。泣くんや。泣いてなみだで洗うんや。」(P2331L19)

この二文では、どじを踏んだ弟に、「アホーッ」と言いながらも適切な処置を、親しさからの乱暴な口調で教えている兄さんらしさがある。

③ チッチを手でつかむというスリルを味わうことができる。(P2330L8)

④ 向こうの土手をゾウの大隊がどっしどっしと歩いていったら、

どんなにすばらしいだろう。(P2331L5)

⑤ えものをねらうヒョウの気分だ。(P2331L7)

⑥ 大枝に体をすべらせにじり寄る気持ちは、野生のけもののもそれと ちっとも変らない。(P2331L8)

これらの文からは、子どもらしい発想の面白さ、豊かな想像力が伺われる。

⑦ ほり出したせっかくの宝物を、目の前でいきなり金づちでたたきつぶされたような無念さ、これを書いた人は、よほど意地悪な人なのだろう。(P2332L14)

この文からは、昆虫の珍種に対するこだわりがかなり強いことが分かる。また、「よほど意地悪な人だ」からは、恨めしく思う気持ちがこう言わせているが、やや言いがかり的でユーモラスである。

⑧ このゆうだいなセミはこの地ではめったにお目にかかることができず、みんなのあこがれの的だった。(P2333L1)

⑨ もしこいつだったら、先生やお母さんの言うことは、なんでも一回だけは聞いてもよいと思う。(P2333L2)

この二文からは、クマゼミに対する思いを「ゆうだいなセミ」「お目にかかることができない」「あこがれの的」とややオーバーに述べ、もし手に入るようなことがあれば、「先生やお母さんの言うことは、なんでも一回だけは聞いてもよい」とその嬉しさの代償までもユーモラスな例で述べている。それでいながら、二文目の始めにクマゼミのことを「こいつ」と言っている。前には最大級に持ち

上げて置いて一気に「こいつ」と落としている。その落差の表現もまたユーモラスである。

⑩ 兄貴の特権を利用して、ミトに早起きを命じた。そして、幼虫がかえりだしたら起こしてくれとたのんだ。(P2333L19)

三日間は早起きしたが、続けて早起きするのに閉口し、兄貴の特権を使って弟に早起きを命じている。本来なら兄貴である自分がやらなければならないことなのに、弟に押し付けているのは特権(もし兄貴に本当に特権があるならば)の悪用である。また、一番見たい「幼虫がかえりだした」時に起こしてくれと虫のいいことを頼んでいる。これは頼んでいるというより、命じているのと変わらない。

⑪ まるで朝のようせいのように神秘的だった。(P2334L9)

⑫ この造化の不思議に吸い込まれてしまう。(P2334L12)

この二文からは、セミや自然の不思議さに敏感に反応している姿がある。

⑬ ぼくも、すごいものを見せるからと、タント兄を引っ張っていった。(P2334L19)

ミンミンゼミの天使の羽を見せて驚かそうと、意気揚々と兄を無理に連れて行ったのである。

⑭ その言葉を聞き流しながら、ぼくは、毎朝ミトに早起きさせたことをくいていた。(P2335L7)

タント兄の言葉を聞き流したのは、思い違いをしてがっかりしたこと、物知り顔に言う兄をいまいましく思ったからであろうし、こんなことになるなら弟を毎朝早起きさせるではなかったと弟を思いやる心に欠けていたことを反省していたからである。

多くの人物像としては、つぎのようにまとめることができる。

ア 三人兄弟の次男であるぼくは、物知りで一日の長のあるタント兄にはかなわないが、弟のミトには適切な処置を教える兄らしさはある。しかし、兄貴の特権（あるとすればだが）を悪用して虫のいいことを命じるが、後でそのことを反省する弟思いのところがあ

イ 子どもらしい発想の面白さや豊かな想像力、ユーモラスさを持っている。

ウ 昆虫の珍種に対するかなり強いこだわり、セミや自然の不思議さに敏感に反応している。

B ミト

① 「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう。」
(P2332L1)

② 「ちっともおかしいないっ。痛いだけや。」ミトはどなり返したが、もらい笑いを始めた。(P2332L3)

ミトは、ぼくの指示を素直に聞いて実行しているが、「どうしよう」とぼくを頼りにして甘えている。しかし、笑ったぼくに腹を立ててどなり返してもらい笑いをするなど天真爛漫な姿がある。

③ 「よろいをかぶったような幼虫から、どうしてうすい羽をもったセミがうまれるんやろ。」と、ミトが不思議そうに言う。
(P2333L4)

④ ミトが寝間へかけこんできた。「すごいのがかえっとる。」
(P2334L1)

⑤ 「ミンミンらしいよ。羽がすき通ってる。」
(P2334L5)

⑥ 「あれっ、羽がうす茶色になってきた。」
(P2334L13)

⑦ 植木ばちの前に、ミトが棒立ちになっていた。ふり返った顔が、なんとも情けない。
(P2334L20)

ぼくから早起きを命じられて素直に言うことを聞いているが、ミトもぼくの影響からであろうがセミに対する興味・関心が相当に強いことが分かる。

ミトの人物像は、つぎようになる。

ア ぼくを頼りにし甘えているところもあるが、天真爛漫でぼくの言うことを素直に聞く。

イ ぼくの影響で、セミに対して興味・関心が相当に強い。

C タント兄

① タント兄はにたと笑い、「おまえ知らなかったのか。アブラでも、かえったときは、ミンミンみたいに羽がすき通ってるのや。」
(P2334L4)

兄の貫禄を示して、物知りなことを弟たちにえらそうに話している姿がある。

二 表現について

1 子どもらしい表現(方言も含む)を探す。

- ① チッチ (P230L8)
- ② 「やられた。」 (P231L10)
- ③ ペッベとつばをはいた。 (P231L11)
- ④ チッチに小便をかけられたに決まってる。 (P231L11)
- ⑤ 「アホーッ。目に入ったらどうする。目えつぶれるぞ。」
(P231L16)
- ⑥ 「目えにもちょっと入った。痛いっ。」 (P231L17)
- ⑦ 「泣け。泣くんや。泣いてなみだで洗うんや。」
(P231L19)
- ⑧ 「泣いたけど、なみだが出えへん。どうしよう。」
(P232L1)
- ⑨ 「ちっともおかしいないっ。痛いだけや。」 (P232L3)
- ⑩ もしこいつだったら、先生やお母さんの言うことは、なんでも一回だけは聞いてもよいと思う。 (P233L2)
- ⑪ 「よろいをかぶったような幼虫から、どうしてうすい羽をもったセミが生まれるんやろ。」 (P233L4)
- ⑫ どちらが本当か知らんが、とにかく毎朝早く起きるのはかなわない。 (P233L16)
- ⑬ 「すごいのがかえっとる。」 (P234L2)
- ⑭ 「かえった後なら、しょうがないわ。」 (P234L3)
- ⑮ 「ミンミンらしいよ。羽がすき通ってる。」 (P234L6)

- ⑬ 「あれっ、羽がうす茶色になってきた。」 (P234L13)
- ⑭ 「ほんとだ。おかしいな。」 (P234L15)
- ⑮ タント兄 (P234L19)
- ⑯ 「どうした。にげたんか。」 (P235L1)
- ⑰ 「おまえら知らなかったのか。アブラでも、かえったときは、ミンミンみたいに羽がすき通ってるのや。」 (P235L5)

2 知的な大人の表現を探す。

- ① 大枝に体をすべらせてにじり寄る気持ちは、野生のけものそれとちっとも変らない。 (P231L8)
- ② ほり出したせっかくの宝物を、目の前でいきなり金づちでたたきつぶされたような無念さ。 (P232L14)
- ③ とうめいな羽に淡緑色の翅脈が走り、まるで朝のようせいのように神秘的だった。 (P234L8)
- ④ 生まれたてのものは、エメラルドの針金で作ったみたいだ。天使の羽というのは、きっとこのようなものなんだろう。
- ⑤ この造化の不思議さに吸いこまれてしまふ。 (P234L10)

3 比喩、擬人法、倒置法を抜き出す。

A 比喩

- ① こぶのように (P 2 3 0 L 1 1)
- ② ヒョウの気分 (P 2 3 1 L 7)
- ③ かりゅうど (P 2 3 1 L 1 3)
- ④ おみやげ (P 2 3 1 L 1 5)
- ⑤ 幹につかまって大声で鳴いているセミと同じ (P 2 3 2 L 4)
- ⑥ いきなり金づちでたたきこわされたような (P 2 3 2 L 1 5)
- ⑦ よろいをかぶったような (P 2 3 3 L 4)
- ⑧ 朝のようせいのように (P 2 3 4 L 9)
- ⑨ エメラルドの針金で作ったみたい (P 2 3 4 L 1 0)
- ⑩ 天使の羽 (P 2 3 4 L 1 1)
- ⑪ 造化の不思議 (P 2 3 4 L 1 2)
- B 擬人法
- ① 時間差を利用して (P 2 3 1 L 2)
- ② つっ立っている (P 2 3 1 L 3)
- C 倒置法
- ① お母さんだったら、こう言うだろう。「自分が楽しようとばかりしたから、きつとばちが当たったんだよ。」と。

二 「黄色いバケツ」 もりやまみやこ・作 二年上 光村図書

I 全文

月曜日

きつねの子が、丸木ばしのたもとで、黄色いバケツを見つけました。

「だれのだろう。」

きつねの子は、バケツを真上から見下ろしました。中に、ほんの

すこし 水が入っていました。

きつねの子は、しゃがんで、バケツにかおを近づけました。中の

水に、かおがうつりました。きつねの子は、あかんべをしました。

べろをちろりと出しました。にこつとわらいました。

それから、立ち上がって、バケツをかた手でさげました。きつね

の子がもつのに、ちょうどいい大きさでした。

きつねの子は、バケツを かおのそばまでもち上げて、外がわを

ながめました。もしかしたら、だれかの名前が 書いてあるかもしれ

ません。でも、名前は、どこにも見つかりませんでした。

「まだ新しいんだ。だれのだろう。」

きつねの子は、前から こんなバケツがほしかったのです。赤

でもない、青でもない、真っ黄色のバケツが。

きつねの子は、バケツを、元のところにおくと、大いそぎで、う

さぎの子のところへ 行きました。

「丸木ばしのそばに、真っ黄色のバケツが　おいてあるんだ。まだ新しくて、ぴかぴかしてるんだ。だれのだか、分らないんだけど。」
きつねの子は、早口でそう言いました。

うさぎの子は、赤いバケツをさげて、ついてきました。川の近くまでくると、くまの子に会いました。くまの子は、青いバケツをさげて、つりざおをもっていました。

「あその丸木ばしのそばに、真っ黄色のバケツがあるんだ。だれのだか分らない、ぴかぴかの　——。」

きつねの子は、そう言いながら、丸木ばしにむかってはしりだしました。うさぎの子もはしりだしました。くまの子もはしりだしました。

黄色いバケツは、元のところにありました。

「なの花ばたけみたいねえ。」

うさぎの子が言いました。

「この水、きつねくんが入れたの。」

くまの子が、バケツの中をのぞいてきました。

「ぼくじゃないよ。見つけたときから入ってたんだ。」

「それじゃ、だれかが入れたんだ。」

「だれかしら。」

「だれだろう。」

三びきは、黄色いバケツをかこんで　考えました。

「たぬきちゃんのバケツは、黒よ。」

うさぎの子が言いました。

「ぶたくんのはみどり色だ。」

きつねの子が言いました。

「さるくんのは何色だっけ。」

くまの子が言いました。

「さるくんは、バケツもってないよ。ぼくもそうだけど。」

きつねの子が、小さいこえで言いました。

「ちょっと、きつねくん。そのバケツ、さげてごらんよ。」

くまの子が言いました。

「こう。」

きつねの子は、かた手でバケツをさげると、目をぱちぱちさせました。

「うん、とってもよくにあう。まるで、きつねくんのみたいだ。」

くまの子が、うなずいて言いました。

「ほんと。ずっと前から、きつねちゃんのだったみたいね。」

うさぎの子も言いました。

「ほんとに、ぼくのだったらねえ。」

きつねの子は、そう言くと、バケツを　しずかに足元におきました。

「もし、だれもとりにこなくて、ずっと、そこにおきっぱなしだっ

たら、きつねくんのしたら。」

くまの子が言いました。

「それがいいわ。ずっと　とりにこないってことは、もう　いらな
いってことなんだから。」

うさぎの子も言いました。

「ずっとって、どれぐらいかな。」

きつねの子がききました。

「あした、あさって、しあさって。そう、しあさってぐらいにしたら。」

うさぎの子が言いました。

「しあさってなんて、すぐくるよ。ずっとっていうのは、もっと先

でなくちゃ。」

くまの子が言いました。

「どれぐらい先になるのかな。」

きつねの子がききました。

「きょうが月曜日だから、つぎの月曜日にしたら。」

くまの子が言いました。

「それじゃ、一週間だね。」

きつねの子が、さけぶように言いました。

「そう、一週間まつのよ。」

うさぎの子が、うなずいて言いました。

火曜日

朝早くから　くらくなるまで、きつねの子は、何べんとなく、丸
木ばしのたもとへ行きました。

「げんちゅう。」

きつねの子は、草原にすわり、うっとりバケツをながめていま
した。

ひるすぎ。

きつねの子は、黄色いバケツのよこで、丸くなって　うたたねを
しました。

夕がた。

きつねの子は、空のバケツをさげて、丸木ばしの上を　行ったり
きたりしました。そのあと、バケツを　川の水で　ていねいにゆす
ぎました。

水曜日

うさぎの子と　くまの子が、バケツを見に　やってきました。

「あるね。」

くまの子が言いました。

「あるわ。」

うさぎの子が言いました。

「月曜日まで、あるといいんだけど。」

きつねの子が言いました。

きつねの子は、川べりにすわり、魚をつる まねをしました。

「つれたあ。ふな一ぴき。」

きつねの子は、空のバケツに、魚を入れる しぐさをしました。

「つれたあ。どじょうの おっきいの。」

きつねの子は、目をかがやかせ、バケツのへりをたたきました。

木曜日

黄色いバケツは、同じところにありました。

きつねの子は、バケツにいっぱい、水をくみ、近くの木のねもとに、やさしくやさしく かけてやりました。本当は、じぶんのうちのりんごの木に、水をかけてやりたかったのです。きつねの子は、赤くうれた りんごのみを、黄色いバケツに入れて、うさぎの子やくまの子のところへはこぶ、じぶんのすがたを思いうかべました。そして、ひとりですこりしました。

金曜日

朝から雨がふりました。

きつねの子は、かさをさして、バケツを見にいきました。バケツは同じところにありました。どしゃぶりの雨の下で、ぬれたバケツを見てみると、きつねの子は、なんだか なきたくなってきました。夕がた。

雨が小ぶりになりました。きつねの子は、こんどは、かさをささないで、バケツを見に行きました。バケツは 同じところにありました。「月曜日には、ぼくのもの。黄色いバケツは ぼくのもの。」

きつねの子は、でたらめのふしをつけて うたいながら、バケツのまわりを ぐるぐる回りました。

土曜日

晴れあがった空の下で、黄色いバケツは、ぴかぴかがやいて見えました。きつねの子は、バケツをひっくりかえして、たまった雨水をながしました。そして、ぼうぎれをひろってきて、バケツのそこに、「きつね こんにちは」

と、名前を書くまねを しました。

日曜日

バケツはちゃんとありました。

くまの子も うさぎの子も、バケツを見にきました。

「だいじょうぶ。あしたは、ぜったい、きみのものだよ。」

くまの子が言いました。

「あと一ばん、まてばいいのよ。」

うさぎの子も言いました。

そのばん。ねる前に、きつねの子は バケツを見に行きました。あたまの上には、明るい月が ひかっていたいました。バケツは、いつものところで、夜風にふかれながら、カタカタ 音を立てていました。

「ふきとばされたら、たいへんだ。」

きつねの子は、バケツをさげて、川へ 水をくみに行きました。ふちまですれすれに くみました。水の上に、丸い月がうつりました。バケツと同じ黄色でした。月は、ゆれながら うかんでいました。きつねの子は、バケツに手をふり、月に「おやすみ」を言っ、うちへかえりました。

夜ふけに、きつねの子は 目をさしました。外で、ヒューヒューと風がうなっていました。

きつねの子は、こっそりおき出して、バケツを見に行きました。月のひかりの下で、バケツは、金色にかがやいていました。そのとき、きゅうに強い風が ふいてきて、バケツを空へふき上げました。「まって。」

きつねの子は、いそいで手をのばしましたが、とどきません。バ

ケツは、月へむかって、みるみる 小さくなっていきました。

「まってたら。」

大きなこえを 上げたたん、きつねの子は、はっと目をさしました。

「ゆめを見たんだ。」

きつねの子は、朝までぐっすりねむりました。

そして、とうとう月曜日。

朝早く、きつねの子が きてみると、バケツはなくなっていました。

「ざんねんだなあ。」

くまの子がきて、言いました。

「きのうは、ちゃんとあったのにねえ。」

うさぎの子もきて、言いました。

「もちぬしが とりにきたのかな。」

「だけれが、通りすがりに ひろっていったのかしら。」

くまの子と うさぎの子が、くちぐちに言いました。

「どっちでもいい。」と、きつねの子は、思いました。たった一週間だったのに、ずいぶんながいこと、黄色いバケツと いっしょにいたような気がしました。その間、あの黄色いバケツは、ほかの だれのものでもなく、いつも じぶんのものだったと、きつねの子は、思

いました。

「いいんだよ、もう。」

きつねの子は、きっぱり言うのと、かおを上げて、空を見ました。青い青い空が、どこまでも広がっていました。

「いいんだよ、ほんとうに。」

きつねの子は、もういちど そう言うのと、くまの子と うさぎの子にむかって、にこっとわらってみせました。

II 学習目標

○ きつねの子は、黄色いバケツが自分の物になることを楽しみにしていたが、バケツがなくなっても一週間の間いつも自分の物だったと思い、きっぱりとあきらめたことが分かる。

○ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。

○ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うことができる。

○ 文章の中の好きなところを書き抜くことができ、感想を書くことができる。

III 文章構成と時間・時数

場面		曜日			時間		時数	
③	②	①	月			1	2	1
			月	日	土			
P 7 2 L 8	P 6 9 L 1 1	P 6 8 L 1	P 8 4 L 1	P 8 1 L 1	P 8 0 L 6	P 7 9 L 1	P 7 8 L 1	P 7 6 L 6
P 7 5 L 2	P 7 2 L 7	P 6 9 L 1 0	P 8 5 L 8	P 8 3 L 5	P 8 0 L 1 2	P 8 0 L 4	P 7 8 L 1 1	P 7 7 L 1 1
1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	2	1	7	6	5	4	4	4

IV 授業構想

1 第一場面①（第一時）

ア
月曜日

きつねの子が、丸木^イばし^ウの^エたもと^オで、黄色いバケツを見つけました。
「だれのだろう。」

きつねの子は、バケツを真上^エから見^オ下ろしました。中に、ほんのすこし^カ 水が入っていました。

きつねの子は、しゃがんで、バケツにかおを近づけました。中の水に、かおがうつりました。きつねの子は、あかんべをしました。べろをちよろりと出しました。にこつとわらいました。

それから、立ち上がって、バケツをかた手でさげました。きつねの子がもつのに、ちようどいい大きさでした。

きつねの子は、バケツを かおのそばまでもち上げて、外がわをながめました。もしかしたら、だれかの名前が 書いてあるかもしれせん。でも、名前は、どこにも見つかりませんでした。

「まだ新しいんだ。だれのだろ。」

きつねの子は、前から こんなバケツがほしかったのでした。赤でもない、青でもない、真っ黄色のバケツが。

2 教材解釈

ア「月曜日」

・ 場面は、月曜日から次の月曜日までの一週間の曜日の見出しをつけて構成されている。

イ「丸木ばし」

・ 一本の丸木をわたした（かけてまたがらせる）橋。

ウ「たもと」

・ 傍。際。

エ「真上」

・ 真っ直ぐ上。

オ「見下ろしました」

・ 「見下ろす」上から下を見る。

カ「ほんの」

・ わずかの。

キ「しゃがんで」

・ 「しゃがむ」膝を曲げて、体を低くする。

ク「近づけました」

・ 「近づける」近くに寄せる。

ケ「あかんべ」

・ （アカメ（赤目）の転）下まぶたを引き下げ、裏の赤い部分を相手に見せて、軽蔑や拒否の意を示す仕草。

コ「べろ」

・ 舌の俗称。

サ「ちよろり」

・ わずかの間に手早くするさま。

シ「にこつとわらいました」

・ 「あかんべ」「べろをちよろり」「にこつとわらいました」は、水に自分の顔を映して、いろいろな表情を楽しんでいる様子。

ス「さげました」

・ 「さげる」 Ⅱ (手に持って) ぶらさげる。

セ「ちようどいい大きさ」

・ 「ちようど」 Ⅱ びったり。

・ きつねの子が気に入る大きさであった。

ソ「もしかしたら」

・ ひょっとしたら。

タ「書いてあるかもしれません」

・ 「かもしれない」 Ⅱ 断定はできないが、その可能性がある。

たぶん だろう。

チ「名前は、どこにも見つかりませんでした」

・ 名前が書いてないということが、一週間の間待つことになる

伏線になっている。

ツ「こんなバケツ」

・ 次の文に出てくる「真っ黄色のバケツ」のこと。

テ「赤でもない、青でもない、真っ黄色のバケツが」

・ 後の文に、うさぎの子は赤いバケツ、くまの子は青いバケツ
を持っていることが紹介される。真っ黄色のバケツは誰も持っ
ていない。バケツの色は信号と同じ色であり、真っ黄色のバケ
ツは注意を要する色である。

・ 「ほしかったのでした」が省略。

3 本時の目標

きつねの子が、丸木橋のたもとで見つけた黄色いバケツはちよ
うどいい大きさで、前から欲しかったものであったことが分かる。

4 板書

丸木ばし

たもと

あかんべ、べろをちよろり、にこっとわらいました

・ いろいろなかおをしている

・ あそんでいる

・ おもしろがっている

・ たのしんでいる

ちようどいい大きさ

・ 気に入った、すきになった、

ほしいと思った

もしかしたら

・ ひょっとしたら

・ 名前が書いてなかった

こんなバケツがほしかった

- ・ 真っ黄色のバケツ
- ・ もっていない

5 発問

A 「丸木ばし」とは、どんな橋のことか。

B 「たもと」とは、橋のどこのことか。

C 「あかんべ」「ペロをちよろり」「にこっとわらいました」というのは、何をしているのか。

D 「ちようどいい大きさ」だったことから、きつねの子はどう思ったと思うか。

E 「もしかしたら」を別の言葉で言くと、どんな言葉になるか。

F 「名前ば、どこにも見つかりませんでした」というのは、なぜか。

G 「こんなバケツがほしかった」

① 「こんなバケツ」とは、どんなバケツのことか。

② 「ほしかった」というのは、なぜか。

6 まとめ

すきなところをノートに書いて、思ったことを書く。

2 第一場面②（第二時）

きつねの子は、^アバケツを、元のところにおくと、だいそぎで、うさぎの子のところへ 行きました。

「丸木ばしのそばに、真っ黄色のバケツが おいてあるんだ。まだ新しくて、^ウぴかぴかしてるんだ。^エだれのだか、分からないんだけど。」
きつねの子は、^オ早口でそう言いました。

うさぎの子は、^カ赤いバケツをさげて、ついてきました。川の近くまでくると、くまの子に会いました。くまの子は、^キ青いバケツをさげて、つりざおをもっていました。

「あそこの丸木ばしのそばに、真っ黄色のバケツがあるんだ。だれのだか分からない、^クぴかぴかの――。」

きつねの子は、そう言いながら、丸木ばしにむかってはしりだしました。うさぎの子もはしりだしました。くまの子もはしりだしました。

黄色いバケツは、元のところにありました。

^コ「なの花ばたけみたいねえ。」

うさぎの子が言いました。

「この水、きつねくんが入れたの。」

くまの子が、バケツの中をのぞいてきました。

「ぼくじゃないよ。見つけたときから入ってたんだ。」

「それじゃ、だれかが入れたんだ。」

「だれかしら。」

「だれだろう。」

三びきは、黄色いバケツをか^シこんで 考えました。

「たぬきちんのバケツは、黒よ。」

うさぎの子が言いました。

「ぶたくんのはみどり色だ。」

きつねの子が言いました。

「さるくんのは何色^スだっけ。」

くまの子が言いました。

「さるくんは、バケツもってないよ。ぼくもそうだけど。」

きつねの子が、小さいこ^セえで言いました。

2 教材解釈

ア「バケツを元のところへおくと」

・ バケツを元あった所にきちんと置いていることから、きつねの子の誠実さ（＝真面目で心のこもっていること）が分かる。

イ「大いそぎで」

・ 誰のバケツなのかを早く確かめたいから。

ウ「ぴかぴか」

・ 光り輝いている様子。

エ「だれのだか」

・ 誰の物なのか。

オ「早口で」

・ 欲しかった黄色いバケツを見つけたことで興奮（＝気持ちが高ぶる）しているから。

カ「赤いバケツ」

・ うさぎの子は、自分のバケツではないことを分からせるために赤いバケツをさげてついでにきた。

キ「青いバケツをさげて、つりざおをもっていました」

・ くまの子は魚釣りに行くつもりで、自分の青いバケツを持っていた。

ク「——」

・ 言葉を入れるなら、「バケツが」「ものが」「が」など。

ケ「はしりだしました」

・ 黄色いバケツの持ち主か、別の者が持って行ってしまっていないかという不安から、きつねの子は走り出し、うさぎの子もくまの子もそれにつられて走りだした。

コ「なの花ばたけみたい」

・ 真っ黄色からの例えで比喩表現。

サ「だれかが入れたんだ」

- ・ 黄色いバケツの持ち主か別の者が入れたことを確かめた。

シ「かこんで」

- ・ 「かこむ」 物の周りを取り巻く。

ス「だっけ」

- ・ だったかな。

セ「小さいこえで言いました」

- ・ 友達の多くがバケツを持っているのに、自分は持っていないため小さい声になった。

3 本時の目標

きつねの子は、黄色いバケツが誰の物なのかを、うさぎの子とくまの子と一緒に考えたことが分かる。

4 板書

バケツを 二元のところにおくと

- ・ もっていかなかった
 - ・ 正じき、まじめ
 - ・ だれのであるかしりたかった
 - ・ ほしいバケツだからときどきししていた
- 早口

びかびかの —— ・ バケツ、ものが、が

はしりだしました ・ なくなっていないか心はい

なの花ばたけみたい ・ 真っ黄色だから

だれかが入れたんだ ・ バケツのもちぬし、べつのもの

だっけ ・ だったかな

小さいこえで言いました

- ・ じぶんだけもっていないから

5 発問

A 「バケツを 二元のところへおくと」とあるが、このことからき

つねの子は、どんな子であることが分かるか。

B 「大いそぎ」とあるが、なぜ急いだのか。

C きつねの子が「早口」で言ったのは、なぜか。

D 「びかびかの ——」の線の所に言葉を入れたら、どんな言葉が入るか。

E きつねの子が「はしりだしました」とあるが、なぜか。

F 「なの花ばたけみたい」というのは、なぜそう思ったのか。

G 「だれかが入れたんだ」とあるが、誰が入れたと思うか。

H 「だっけ」を別の言い方にするとうなるか。

I きつねの子が「小さいこえで言いました」とあるが、なぜか。

6 まとめ

すきなところをノートに書いて、思ったことを書こう。

1 第一場面③ (第三時)

「ちょっと、きつねくん。そのバケツ、さげてもらんよ。」

くまの子が言いました。

「こう。」

きつねの子は、かた手でバケツをさげると、目をぱちぱちさせました。

「うん、とってもよくにあう。まるで、きつねくんのみたいだ。」

くまの子が、うなずいて言いました。

「ほんと。ずっと前から、きつねちゃんのだったみたいね。」

うさぎの子も言いました。

「ほんとに、ぼくのだったらねえ。」

きつねの子は、そう言くと、バケツを しずかに足元におきました。

「もし、だれもとりにこなくて、ずっと、そこにおきっぱなしだったら、きつねくんのしたら。」

くまの子が言いました。

「それがいいわ。ずっと とりにこないってことは、もう いらないってことなんだから。」

うさぎの子も言いました。

「ずって、どれぐらいかな。」

きつねの子がきました。

「あした、あさつて、しあさつて。そう、しあさつてぐらいにしたら。」

うさぎの子が言いました。

「しあさつてなんて、すぐくるよ。ずつっていうのは、もつと先でなくちゃ。」

くまの子が言いました。

「どれぐらい先になるのかな。」

きつねの子がきました。

「きょうが月曜日だから、つぎの月曜日にしたら。」

くまの子が言いました。

「それじゃ、一週間だね。」

きつねの子が、さげぶように言いました。

「そう、一週間まつのよ。」

うさぎの子が、うなずいて言いました。

2 教材解釈

ア「こう」

・ これでもいいの。こうかい。

イ「目をばちばちさせました」

・ 「ばちばち」 Ⅱ まばたきするさま。

・ 「ぼくのじゃないのにいいのかなあ」「ぼくが持つのはおかしくないかなあ」「ぼくのだったらいいのになあ」という気持ちの揺れが表れている。

ウ「まるで、きつねくんのみたいだ」

・ 「まるで」 Ⅱ ちょうど。

・ きつねくんのバケツみたいだと言われて、きつねの子は嬉しく思っている。

エ「うなずいて」

・ 「うなずく」 Ⅱ 頭を前に振る。

オ「きつねちゃんのだったみたいね」

・ きつねちゃんのバケツだったみたいね。

カ「ほんとに、ぼくのだったらねえ」

・ 口に出して初めてこのバケツが欲しい気持ちをもたらしている。

キ「しずかに足元におきました」

・ 「足元」 Ⅱ 足の下。

・ 自分が気に入って、欲しいバケツなので大切に扱っている。

ク「だれもとりにこなくて、ずっと、そこにおきっぱなしだったら」

・ 「おきっぱなし」 Ⅱ 長い間同じ所に捨てておくこと。

・ 持ち主がいなくて、ずっとそこに置いてあるならの意。

ケ「きつねくんのにしたら」 コ「それがいいわ」

・ くまの子もうさぎの子も、きつねの子がバケツを持っていなくて、その黄色いバケツがとても気に入っていることが分かるからこう言っている。きつねの子の気持ちを思いやれる優しい二匹である。

サ「しあさってぐらいいしたら」

・ うさぎの子は、三日間を提案。

シ「どれぐらい先になるのかな」

・ きつねの子にとっては、何日待つことになるのか最大の関心事である。

ス「さげぶように言いました」

・ 「一週間経ったら自分の物にしていんだね。」と念を押している。気持ちの高ぶりが叫ぶような言い方になった。

3 本時の目標

黄色いバケツを一週間待っても誰も取りに来なかったら、きつねの子の物になることを相談したことが分かる。

4 板書

こう ・ これでいいの、こうかい（説明）

目をばちばちさせました

- ぼくのじゃないのにいいのかな
- ぼくがもつのはおかしくないかな
- ぼくのだったらいいのになあ
- あたまをまえにふる
- うなずいて
- ほんとに、ぼくのだったらねえ

• このバケツがほしい
しずかに足元におきました

• 大せつにしている
おきっぱなし
• ながいあいだおなじところにおいておく
きつねくんのしたら、それがいいわ

- とても気に入ったみたいだから
- ほしそうにしているから
- やさしい、ともだち思い
- 三日かん
- しあさって

どれぐらい先になるのかな

• とても気になること
さけぶように言いました

• たしかめるため

5 発問・説明

A 「こう」というのは、「これでいいの」「こうかい」とくまの子に聞いている言葉である。

B きつねの子が「目をばちばちさせました」とあるが、どんな気持ちだったのか。

C 「うなずいて」とあるが、どのようにすることか。

D 「ほんとに、ぼくのだったらねえ」とは、どんな気持ちのことか。

E 「しずかに足元におきました」から、どんなことが分かるか。

F 「おきっぱなし」とは、どのようになっていることか。

G 「きつねくんのしたら」「それがいいわ」

① くまの子やうさぎの子が、このように言ったのはなぜか。

② このことから、くまの子やうさぎの子は、どんな子であることが分かるか。

H 「しあさって」とは、何日間になるか。

I きつねの子が「どれぐらい先になるのかな」と聞いたのは、なぜか。

J きつねの子が「さけぶように言いました」とあるが、なぜか。

6 まとめ

好きなところをノートに書いて、思ったことを書こう。

1 第二・三場面（第四時）

火曜日

朝早くから くらくなるまで、きつねの子は、^ア何べんとなく、丸木ばしのたもとへ行きました。

^イ「ごぜんちゅう」。

きつねの子は、草原にすわり、^ウうっとりとバケツをながめていました。

ひるすぎ。

きつねの子は、黄色いバケツのよこで、丸くなって ^エうたたねをしました。

夕がた。

きつねの子は、空のバケツをさげて、丸木ばしの上を ^オ行ったりきたりしました。そのあと、バケツを ^カ川の水で ^カ洗いぬいでゆすぎました。

水曜日

うさぎの子と くまの子が、バケツを見に やってきました。

「あるね。」

くまの子が言いました。

「あるわ。」

うさぎの子が言いました。

「月曜日まで、あるといいんだけど。」

きつねの子が言いました。

きつねの子は、^キ川べりにすわり、魚をつる まねをしました。

「つれたあ。ふな一ぴき。」

きつねの子は、空のバケツに、^ク魚を入れる しぐさをしました。

「つれたあ。どじょうの おっきいの。」

きつねの子は、^ケ目をかがやかせ、バケツのへりをたたきました。

2 教材解釈

ア「何べんとなく」

・ 何度も。

・ 黄色いバケツがなくなっていないかを確かめに何度も足を運んでいる。きつねの子の心配ぶりが表れている。

イ「ごぜんちゅう」

・ 昼前。

ウ「うっとり」

・ 美しいもの、素晴らしいものに心が奪われてぼんやりする様子。
・ 自分の物になるかもしれない黄色いバケツに心を奪われてぼんやりと見入っていた。

エ「うたたね」

・ 寝床に入らないで、うとうとと寝てしまうこと。

・ 黄色いバケツの横であれば、安心して眠ることができる。何かあればすぐに起きて対応できる。

オ「行ったりきたりしました」

・ 黄色いバケツが自分の物になったことを想定して歩いている。

カ「ていねいにゆずぎました」

・ 「ゆずぐ」 きれいな水で、汚れを洗い流す。

・ 自分の物になるかもしれない黄色いバケツをきれいに洗って大切にしている様子が分かる。

キ「川べり」

・ 川岸。川の傍。

ク「魚を入れる しぐさをしました」

・ 「しぐさ」 何かをする時の動作。身振り。

・ 黄色いバケツが自分の物になったら、魚入れに使うと思って、ジュエスチャーをして楽しんでる。

ケ「目がかがやかせ、バケツのへりをたたきました」

・ 「かがやかす」 きれいきら光らせる。

・ 「へり」 物の端。ふち。

・ ひたすら魚釣りの空想の世界で、釣り人になり切って楽しんでる。

でいる。

3 本時の目標

きつねの子が、火曜日には朝早くから暗くなるまで何度も黄色いバケツのある所へ行き、水曜日には黄色いバケツに釣り真似をした魚を入れる仕草をして楽しんだことが分かる。

4 板書

何べんとなく

・ 何ども（説明）

・ 黄色いバケツがあるかどうかをたしかめに

・ とても心ばいしている

うっとり

・ すてきなバケツだなあ、いいバケツだなあ

・ はやくじぶんのものになってほしいな

うたたね

・ うとうととねてしまうこと（説明）

・ バケツのよこならあん心

行ったりきたり

・ じぶんのものになったつものりのれんしゅう

ゆずぎました

・ よごれをあらいながした

・ きれいにして大せつにしている

川べり

・ 川のそば

魚を入れる しぐさをしました

・まねをした

・つった魚入れにつかおう

目をかがやかせ

・目をきらきらひかせて（説明）
バケツのへりをたたきました

・はし、ふち

・魚つりのまねをしてたのしんでいる

・むちゅうになっている

5 発問・説明

A 「何べんとなく」

① 「何べんとなく」というのは、「何ども」ということである。

② きつねの子は、一日中なぜ「何べんとなく」丸木橋のたもとへ行ったのか。

B きつねの子は、「うっとり」とバケツを眺めていたが、どんなことを思っていたと思うか。

C 「うたたね」

① 「うたたね」とは、うとうとと寝てしまうことである。

② なぜ、バケツの横で寝たのか。

D バケツをさげて「行ったりきたり」したのは、何のためか。

E 「ゆすぎました」

① どうすることか。

② なぜ、こんなことをしたのか。

F 「川べり」とは、川のどこのことか。

G 「魚を入れる しぐさをしました」

① 魚を入れる何をしたのか。

② バケツを何に使おうと思っているのか。

H 「目をかがやかせ」というのは、目をきらきら光らせてということである。

I 「バケツのへりをたたきました」

① 「へり」とは、バケツのどこのことか。

② きつねの子は、どんな気持ちでやっているのか。

6 まとめ

すきなところをノートに書いて、思ったことを書こう。

1 第四・五・六場面（第五時）

木曜日

黄色いバケツは、同じところにありました。

きつねの子は、バケツにいっぱい、水をくみ、近くの木のねもとに、
やさしくやさしく かけてやりました。本当は、じぶんのうちのりん

この木に、水をかけてやりたかったです。きつねの子は、赤くうれ
たりんごのみを、黄色いバケツに入れて、うさぎの子やくまの子の
ところへはこぶ、じぶんのすがたを思いうかべました。そして、ひと
りでにっこりしました。

金曜日

朝から雨がふりました。

きつねの子は、かさをさして、バケツを見にいきました。バケツは
同じところがありました。どしゃぶりの雨の下で、ぬれたバケツを
見ていると、きつねの子は、なんだかなきたくなってきました。

夕がた。

雨が小ぶりになりました。きつねの子は、こんどは、かさをささな
いで、バケツを見に行きました。バケツは、同じところがありました。

「月曜日には、ぼくのもの。黄色いバケツは、ぼくのもの。」

きつねの子は、でたらめのふしをつけて、うたいながら、バケツのま
わりをぐるぐる回りました。

土曜日

晴れあがった空の下で、黄色いバケツは、ぴかぴかかやいて見え
ました。きつねの子は、バケツをひっくりかえして、たまった雨水を
ながしました。そして、ぼうぎれをひろってきて、バケツのそこに、

「きつね こんすけ」

と、名前を書くまねを しました。

2 教材解釈

ア「ねもと」

・ 根の所。

イ「やさしくやさしく かけてやりました」

・ 木をいたわって（＝やさしく親切にする） 水かけをするきつ
ねの子の優しさ。

・ 水曜日は魚を入れるバケツ、木曜日は水を汲み水をかけると
いうバケツの利用方法。

ウ「本当は、自分のうちのりんごの木に、水をかけてやりたかった
のです」

・ バケツを持って自分の家へ行ってしまうば、バケツの持ち主
が困るであろうし、バケツはまだ自分の物ではないから、持っ
て帰ることができない。律儀（＝真面目で義理堅いこと） なき
つねの子である。

エ「赤くうれた」

・ 「うれる」＝実が熟する（＝よくみのる）

・ 赤くうれたりんごを運ぶのにバケツを使う利用方法。

カ「思いうかべました」

・ 「思いうかべる」 Ⅱ頭の中で考える。

・ 黄色いバケツが自分の物になったら、そのバケツでりんごの実を運んでいる姿を想像していた。

キ「にっこりしました」

・ そんな姿に満足して嬉しく思っていた。

ク「どしゃぶり」

・ 雨が非常に激しく降ること。

ケ「なんだかなきたくなってきました」

・ 「なんだか」 Ⅱ何となく。どうしてだか分からないが。

・ 黄色のバケツが、どしゃぶりの雨に濡れているのを見てかわいそうで悲しくなった。自分の物だったら、雨に濡れないよう大切にするのに、今はどうにもできない。

コ「小ぶり」

・ 雨の降り方が弱いこと。

サ「かさをささないで」

・ 小ぶりになったので、黄色いバケツと同じように雨に濡れてもよいという気持ちになった。

シ「でたらめのふしをつけて うたいながら」

・ 「でたらめ」 Ⅱいい加減な様子。

・ 「ふし」 Ⅱ歌や曲の音の流れ。メロディー。

・ 今日で五日経ったが持ち主は現れない。後二日経てばぼくのものになる。その嬉しさがあふれている。

ス「ぼうぎれ」

・ 棒の切れ端（Ⅱ物の一部分）

・ 短い棒。

セ「名前を書くまねを しました」

・ 日一日と自分の物になる日が近づいている。持ち主がまだ現れないところから、もう確実ではないかときつねの子は思っている。名前を書く真似までするきつねの子のいじらしさが表れている。

3 本時の目標

きつねの子が、木曜日には黄色いバケツで木に水をかけ、金曜日には雨の中で「黄色いバケツは月曜日にはぼくのもの」と歌い、土曜日には黄色いバケツに自分の名前を書くまねをしたことが分かる。

4 板書

本当は、じぶんのうちのりんごの木に、水をかけてやりたかったのです

・バケツはまだじぶんのものではない

・まじめ、やくそくをまもる

赤くうれた

・赤くみのった

思いうかべました

・あたまの中でかんがえた

にっこりしました

・思うだけでもたのしい、うれしい

どしゃぶり

・雨がひじょうにはげしくふること

なきたくなってきました

・バケツがかわいそうでかなしくなった

・じぶんのバケツだったらぬれないように

するの

小ぶり

・雨のふりかたがよいこと

かさをささないで

・バケツとおなじようにぬれてもいい

でたらめのふしをつけて

・いいかげんなふし

・あと三日でぼくのものになるうれしさ

ぼうぎれ

・みじかいぼう（説明）

名前をかくまねをしました

・あと二日でぼくのものになるうれしさ

A 「本当は、じぶんのうちのりんごの木に、水をかけてやりたかったのです」

① なぜ、自分の家のりんごの木に水をかけなかったのか。

② このことから、きつねの子はどんな子であることが分かるか。

B 「赤くうれた」とは、りんごの実がどうなることか。

C 「思いうかべました」とは、どのようにしたのか。

D 「にっこりしました」とあるが、なぜにっこり笑ったのか。

E 「どしゃぶり」とは、どんな雨の降り方か。

F 「なきたくなってきました」とあるが、なぜ泣きたくなったのか。

G 「小ぶり」とは、雨の降り方がどうなることか。

H 「かさをささないで」とあるが、まだ「小ぶり」で雨が降っているのに、なぜ傘をささなかったのか。

I 「でたらめのふしをつけて うたいながら」

① 「でたらめのふし」とは、どんなふしのことか。

② どんな気持ちで歌ったのか。

J 「ぼうぎれ」とは、短い棒のことである。

K 「名前を書くまねをしました」とあるが、どんな気持ちでしたのか。

すきなところをノートに書いて、思ったことを書く。

1 第七場面（第六時）

日曜日

バケツはちゃん^アとありました。

くまの子も うさぎの子も、バケツを見にきました。

「だいじょうぶ。あしたは、ぜったい、きみのものだよ。」

くまの子が言いました。

「あと一ばん、まてばいいのよ。」

うさぎの子も言いました。

そのばん。ねる前に、きつねの子は バケツを見に行きました。あたまの上には、明るい月が ひかっていた。バケツは、いつものところで、夜風にふかれながら、カタカタ 音を立てていました。

「ふきとばされたら、たいへんだ。」

きつねの子は、バケツをさげて、川へ 水をくみに行きました。

ちまですれすれに くみました。水の上に、丸い月がうつりました。

バケツと同じ黄色でした。月は、ゆれながら うかんでいました。き

つねの子は、バケツに手をふり、月に「おやすみ」を言って、うちへ

かえりました。

夜ふけに、きつねの子は 目をさしました。外で、ヒューヒュー

と風がうなっていました。

きつねの子は、こっそりおき出して、バケツを見に行きました。月

のひかりの下で、バケツは、金色^サにかがやいていました。そのとき、

きゆうに強い風が ふいてきて、バケツを空へふき上げました。

「まって。」

きつねの子は、いそいで手をのばしましたが、とどきません。バケ

ツは、月へむかって、みるみる 小さくなっていきました。

「まてたら。」

大きなこえを 上げたたん、きつねの子は、はたと目をさまし

た。

「ゆめを見たんだ。」

きつねの子は、朝までぐっすりねむりました。

2 教材解釈

ア「ちゃんと」

・ 確かに。

イ「バケツを見にきました」

・ きつねの子が楽しみにして待っているのを知っているくまの

子とうさぎの子は、バケツがあるかどうか心配して見にきた。

ウ「だいじょうぶ」エ「あと一ばん、まてばいいのよ」

・ 二匹は、きつねの子を励ましている。

オ「ねる前に、きつねの子は バケツを見に行きました」

・ 次の日の朝には、バケツは自分の物。寝る前の最後の最後までバケツを確かめに行っている。

カ「ふきとばされたら」

・ きつねの子が夢の中で見た「きゅうに強い風がふいてきて、バケツを空へふき上げました」の伏線になっている。

キ「ふちまですれすれに」

・ 「ふち」＝へり。はし。

・ 「すれすれ」＝ぎりぎりいっぱい。

・ 水の重さでバケツが吹き飛ばされないようにした。

ク「夜ふけ」

・ 真夜中。

ケ「うなって」

・ 「うなる」＝鳴り響く。

コ「こっそりおき出して」

・ 「こっそり」＝誰にも知られないように。そっと。

サ「金色にかがやいていました」

・ 月の黄色の光とバケツの黄色が重なって金色に見えた。それはまた、きつねの子にとって、金色に光る宝物であった。

シ「ふき上げました」

・ 「ふき上がる」＝吹かれて空へ上がる。

ス「バケツは、月へむかって、みるみる小さくなっていきました」

・ きつねの子が伸ばした手がバケツに届かず遠くなってしまったのは、きつねの子が黄色いバケツを手にするのができなかったことを暗示し、次の第八場面の伏線になっている。

・ きつねの子から離れて、月に向かってバケツがみるみる小さくなっていく様子は、遠近法で表されている。

セ「たら」

・ 自分の意が満たされず、いらだたしい思いであることを示す。

「といったら」の意。

ソ「とたん」

・ ちょうどその時。

タ「はっと」

・ 急に気がついて驚く様子。

チ「ゆめを見たんだ」

・ 本当のことではなくてよかったと安心して寝た。

ツ「ぐっすり」

・ 深く十分に眠る様子。

3 本時の目標

きつねの子が、日曜日に強い風が黄色いバケツを空へ吹き上げ、みるみる小さくなる夢を見たことが分かる。

4 板書

バケツを見にきました

・バケツがあるかどうか心ばい

だいじょうぶ、あと一ばん、まてばいいのよ

・はげましている

ねる前に

ふちまですれすれに

・水のおもさでふきとばされないように

夜ふけ

こっそりおき出して

・うちの人たちにしられないように

金色にかがやいていました

・月の黄色の光とバケツの黄色

・たからもの

手をのばしましたが、とどきません

・バケツがきつねの子からはなれていった

みるみる

とたん

ゆめを見たんだ

・見ているうちに、見るまに（説明）

・ちょうどそのとき（説明）

・ゆめでよかったとあん心した

5 発問・説明

A くまの子とうさぎの子が「バケツを見にきました」とあるが、なぜ見に来たのか。

B くまの子が「だいじょうぶ」、うさぎの子が「あと一ばん、まてばいいよ」と言っているのは、どういうつもりか。

C 「ねる前」にまでバケツを見たのは、何のためか。

D 「ふちまですれすれ」

① どこまで水を入れたのか。

② なぜこんなことをしたのか。

E 「夜ふけ」とは、夜のいつのことか。

F 「こっそりおき出して」とあるが、「こっそり」したのはなぜか。

G 「金色にかがやいていました」

① どうして金色に輝いていたように見えたのか。

② それは、きつねの子にとって何のように見えたのか。

H 「手をのばしましたが、とどきません」というのは、バケツがきつねの子からどうなったのか。

I 「みるみる」というのは、「見ているうちに」「見るまに」ということである。

J 「とたん」というのは、「ちょうどそのとき」ということである。

K きつねの子は「ゆめを見たんだ」と言っているが、この時どんなことを思っていたと思うか。

6 まとめ

すきなところをノートに書いて、思ったことを書く。

1 第八場面（第七時）

そして、とうとう月曜日。

朝早く、きつねの子が きてみると、バケツはなくなっていました。

「ざんねんだなあ。」

くまの子がきて、言いました。

「きのうは、ちゃんとあったのにねえ。」

うさぎの子もきて、言いました。

「もちぬしが とりにきたのかな。」

「だれかが、通りすがりに ひろっていったのかしら。」

くまの子と うさぎの子が、くちぐちに言いました。

「どっちでもいい。」と、きつねの子は、思いました。たった一週

間だったのに、ずいぶんながいこと、黄色いバケツと いっしょに

たような気がしました。その間、あの黄色いバケツは、ほかの だれ

のものでもなく、いつも じぶんのものだったと、きつねの子は、思

いました。

「いいんだよ、もう。」

きつねの子は、きっぱり言くと、かおを上げて、空を見ました。青い

青い空が、どこまでも広がっていました。

「いいんだよ、ほんとうに。」

きつねの子は、もういちど そう言くと、くまの子と うさぎの子に

むかって、にこっとわらってみせました。

2 教材解釈

ア「とうとう」

・ ついに。

イ「朝早く」

・ やつとぼくの物になると、きつねの子は朝早く起きて喜び勇

んで丸木橋の黄色いバケツの置いてある所へやって来た。

ウ「バケツはなくなっていました」

・ きつねの子が寝る前にバケツを見に来た時には確かにあったの
になくなっていった。それ以降の間になくなっていったことになる。

きつねの子の驚き、落胆はかりしれないものであったであろう。

エ「さんねん」

・ 悔しい。

オ「通りすがり」

・ たまたまそこを通りかかること。

カ「くちぐちに」

・ みんなが思い思いにものを言う様子。

キ「どっちでもいい」

・ くまの子とうさぎの子が言った「持ち主が取りに来た」「誰かが通りすがりに拾っていった」ことを指している。

・ きつねの子にしてみれば、黄色いバケツがなくなっていたのは厳然たる事実であり、理由などはどうでもよかったのである。

ク「ずいぶんがいいこと」

・ 「ずいぶん」≡非常に。大変。

・ 大変長い間。

ケ「いっしょにいたような気がしました」

・ 一週間の間、ほとんど一日中、黄色いバケツと関わっていた。

コ「いつも じぶんのものだった」

・ 一週間の間、自分の思うようにバケツを扱って、十分に満足した気持ちになっていた。

サ「いいんだよ、もう」

・ 二つの意味が考えられる。一つは、くまの子とうさぎの子の慰めに対して、もう気にしてくれなくていいという意味であり、もう一つは、自分の気持ちの中で黄色いバケツに対する思いが整理できた（≡吹っ切れた）ことである。

シ「きっぱり」

・ はっきりと決める様子。

ス「青い青い空が、どこまでも広がってました」

・ 情景描写であると同時に、きつねの子の心情描写でもある。黄色いバケツへの思いと決別しすっかりとしたきつねの子の気持ちを表している。

セ「にこっとわらってみせました」

・ ぼくは「だいじょうぶだよ」ということを笑うことによって示し、くまの子とうさぎの子を安心させた。

3 本時の目標

月曜日には黄色いバケツがなくなっていたが、きつねの子は一週間の間はいつも自分の物だったと思い、きっぱりとあきらめたことが分かる。

朝早く

• よろこんで、げん気よく、にこにこして
バケツはなくなっていました

• びっくりした、がっかりした、
なきそうになった

さんねん

• くやしい

通りすがり
• ちょうどそこを通りかかること（説明）

くちぐちに
• それぞれが言うようす（説明）

どっちでもいい
• もちぬしがとりにきたこと

• だれかが通りすがりにひろっていったこと

• 黄色いバケツがなくなっていたから

いつもじぶんのものだった

• じぶんといつもいっしょだった

• じぶんのバケツのようにつかっていた

• じゅうぶんまんぞくした

いいんだよ、もう

• なぐさめてくれなくてもいいよ

• 黄色いバケツはあきらめた

きっぱり

• はっきりとあきらめたようす（説明）

青い青い空

• すっきりとした気もち

にこっとわらってみせました

• ぼくのことはだいじょうぶ

• 心ばいかけないように

5 発問・説明

A きつねの子は「朝早く」来る時、どんな様子だったと思うか。

B 「バケツはなくなっていました」とあるが、このとききつねの子
はどんな気持ちだったと思うか。

C 「さんねん」とは、どんな気持ちのことか。

D 「通りすがり」とは、ちょうどそこを通りかかることである。

E 「くちぐちに」とは、くまの子とうさぎの子がそれぞれ言う様
子のことである。

F 「どっちでもいい」

① 「どつとでも」とは、くまの子とうさぎの子が言ったことだ
が、それは何か。

② 「どっちでもいい」と言ったのはなぜか。

G 「いつもじぶんのものだった」とは、どういうことを言ってい
るのか。

H 「いいんだよ、もう」とは、何がもういいのか二つ考えてみよう。

I 「きっぱり」というのは、はっきりと決めた様子のことである。

J 「青い青い空」というのは、きつねの子の気持ちを表しているがどんな気持ちか。

K 「にこっとわらってみせました」は、なぜくまの子とうさぎの子に笑って見せたのか。

6 まとめ

すきなところをノートに書いて、思ったことを書こう。

V 読書指導の扱い

この教材を読書として扱う場合の観点について記述する。

一 月曜日

きつねの子が、黄色いバケツをどう思っていたかが分かる文を探す。

① きつねの子は、前から こんなバケツがほしかったのです。赤でもない、青でもない、真っ黄色のバケツが。(P 69 L 9)

② 「ほんとに、ぼくのだったからねえ。」(P 73 L 4)

③ 「それじゃ、一週間だね。」きつねの子が、さげぶように言いました。(P 74 L 11)

二 火曜日～土曜日

1 きつねの子が、バケツと仲良くしたことを抜き出す。

① きつねの子は、草原にすわり、うっとりとバケツをながめていました。(P 75 L 9)

② きつねの子は、黄色いバケツのよこで、丸くなって うたたねをしました。(P 75 L 12)

③ きつねの子は、空のバケツをさげて、丸木ばしの上を 行ったりきたりしました。そのあと、バケツを 川の水で ていねいにゆすぎました。(P 76 L 3)

④ きつねの子は、空のバケツに、魚を入れる しぐさをしました。(P 77 L 5)

⑤ きつねの子は、目をかがやかせ、バケツのへりをたたきました。(P 77 L 9)

⑥ きつねの子は、バケツにいっぱい 水をくみ、近くの木のねもとに、やさしくやさしくかけてやりました。(P 78 L 3)

⑦ きつねの子は、でたらめのふしをつけて うたいながら、バケツのまわりを ぐるぐる回りました。(P 80 L 3)

⑧ きつねの子は、バケツをひっくりかえして、 たまった雨水をながしました。そして、ぼうぎれをひろってきて、バケツのそこに、「きつね こんにちは」と、名前を書くまねを しました。(P 80 L 8)

⑨ きつねの子は、バケツをさげて、川へ 水をくみに行きました。ふちまですれすれに くみました。(P 82 L 1)

⑩ きつねの子は、バケツに手をふり（P 82 L 3）

2 バケツがなくなっていることを予想できる文を探す。

① そのとき、きゅうに強い風が ふいてきて、バケツを空へふき上げました。（P 82 L 8）

② きつねの子は、いそいで手をのびしましたが、とどきません。バケツは、月へむかって、みるみる 小さくなっていききました。

（P 82 L 11）

三 そして、とうとう月曜日

きつねの子が、「いいんだよ、もう。」と言ったわけを考える。

二つのことが考えられる。

① くまの子とうさぎの子の慰めに対して、もう気にしてくれなくてもいいよということである。

② 「ずいぶんながいこと、黄色いバケツと いっしょにいたような気がしました」「いつもじぶんのものだった」ときつねの子が思ったように、一週間の間、自分の好きなようにバケツと関わって十分に満足した気持ちになっていたのである。そのことで、黄色いバケツに対するあきらめがきっぱりとできたからである。

参考文献

- ① 「変身したミンミンゼミ」 河合雅雄・文 六年 光村図書
- ② 『小学校国語学習指導書 6下 創造』 光村図書
- ③ 「黄色いバケツ」 もりやまみやこ・作 二年上 光村図書
- ④ 『小学校国語学習指導書 2上 たんぽぽ』 光村図書
- ⑤ 『国語大辞典』金田一春彦編ほか 小学館 一九八二年 発行
- ⑥ 『広辞苑』新村出編 岩崎書店 一九七七年 発行
- ⑦ 『新選国語辞典』金田一京助編ほか 小学館 一九八八年 発行
- ⑧ 『小学国語新辞典』旺文社 二〇〇九年 発行